



TITLE:

なぜbaseball は棒球と訳されたか -
翻訳から見る近代中国スポーツ史-

AUTHOR(S):

高嶋, 航

CITATION:

高嶋, 航. なぜbaseball は棒球と訳されたか -翻訳から見る近代中国スポーツ史-. 京都大学文学部研究紀要 2016, 55: 81-133

ISSUE DATE:

2016-03-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209962>

RIGHT:

なぜ baseball は棒球と訳されたか

—翻訳から見る近代中国スポーツ史—

高 嶋 航

はじめに

中国語で野球のことを「棒球」という。なぜ「野球」ではなく「棒球」なのか。文化の違い、発想の違いという答えが返ってくるかもしれない。しかし、他の競技名の訳語についてみた場合、籠球は「籃球」、庭球は「網球」という具合に中国語はほとんど日本語と一致しないのに対し、韓国語はことごとく日本語と一致することを考えると（表1）、たんに技術的な翻訳の問題として片づけるわけにはいかなくなる。そもそも近年の研究は、中国が近代西洋文明を受容するにあたって明治日本で創出された近代漢語が重要な役割を果たしたこと、近代漢語を媒介として共通する文明の基盤が東アジアに形成されていたことを明らかにしてきた¹。とするならば、近代西洋文明の一つであるスポーツの訳語が中国と日本・朝鮮でこれほど一致しないのはなぜだろうか。

表1 スポーツ用語の訳語比較

英語	baseball	basketball	tennis	track & field	football	volleyball
中国語	棒球	籃球	網球	田徑賽	足球	排球
日本語	野球	籠球	庭球	陸上競技	蹴球	排球
韓国語	야구	농구	정구	육상경기	축구	배구

¹ 狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会、2001年、石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年、狭間直樹『梁啓超：近代東アジア文明圏形成の功労者』（近刊）など。米国のbaseballが日本と朝鮮において「野球」となる過程については、竹内通夫「明治期学校教育における野球の興隆：「ベースボール」から「野球」へ」江藤恭二監修『教育近代化の諸相』名古屋大学出版会、1992年、小野容照「朝鮮における野球の受容：朝鮮で「ベースボール」は如何にして「野球」になったのか」山本浄邦編『韓流・日流：東アジア文化交流の時代』勉誠出版、2014年を参照。

本稿は翻訳を複数の文化間で言語や主体や概念などをめぐって繰り上げられる交渉の総体と考える。この解釈を用いれば、スポーツの翻訳を、西洋（とくにアメリカ）と日本と中国のあいだで、スポーツの中国語化（言語）、スポーツの中国人化（主体）、スポーツの中国化（概念）などをめぐって繰り上げられた交渉の総体としてとらえることが可能であろう。スポーツの用語に見られる日本語と韓国語の一致、日本語と中国語の不一致はこれらの交渉の帰結にほかならない。本稿はスポーツの翻訳という問題を通して、近代東アジアのスポーツ史の一端を解明する試みであるが、その射程は決してスポーツの世界にとどまるものではないと考える。

第1章では、清末民初における英米式スポーツと日本式体操の併存状況について考察する。この時点で、スポーツはいまだ翻訳されず、中国社会から隔離された空間にとどまっていた。第2章では、1910年代後半にスポーツが中国社会に包摂される過程を検討する。この過程を推進したのはYMCA関係者であった。とくにYMCAの外国人体育主事たちは、当時学校体育の主流であった日本式体操に対抗するために、スポーツの中国語化を進め、体育の概念をアメリカ化することに成功する。第3章では、まず1920年代のナショナリズムの高揚がスポーツ界の急速な中国人化をもたらしたことを確認する。そして、スポーツの中国人化が、スポーツの中国語化の意義を変えただけでなく、スポーツの概念を中国化する契機となったことを示す。附論では、本論で明らかにしたスポーツの翻訳をめぐる全体的な状況を踏まえつつ、個別のスポーツ用語の翻訳過程を検討する。そこではなぜ「排球」だけが日本と中国で同じ訳語を採用にいたったかについても示されるであろう。

第一章 軍国主義と体操

英米式の競技会とスポーツ

有山輝雄によれば、「遊戯が成立するためには、日常性から隔離され、それだけで完結した時間と空間が必要」であり、「明治の社会において、そうした人工的な遊戯世界を成立させるいわば特権的な時間と空間を提供できたのが、大学予備門、第一高等中

学校などの高等教育機関」だった²。中国の場合、このような「特権的な時間と空間」を提供しえたのは、ミッションスクールしかなかった。それは時間と空間のみならず言語の点でも中国社会から遊離した存在であった。初期のミッションスクールの学生は伝統的な身体観にあまり束縛されない階層の出身者が多かったが、それはスポーツの受容にプラスに作用した。当初、学生たちはスポーツをするために、「まず辮髪を頭に巻き付けて固定し、長い爪を短く切っておき、不便な長い上着を脱がねばならなかった³」。このようなふるまいは彼らの男性性を著しく損なわせたが、「特権的な時間と空間」がそれを可能にしたのである⁴。

しかし、こうした過渡期の現象は長くは続かなかった。その象徴的な事例が、1910年に南京で開催され、のちに第1回全国運動会と追認されることになる「全国学校区分隊第一次体育同盟会」での出来事である⁵。天津の普通中学堂（YMCA Day School, Tien-tsin）の孫宝信は走高跳に出場したが、辮髪がバーにあたって失格となった。悔しい思いをした孫は翌日辮髪を切った姿で現れ、見事優勝した。じつは華北代表のうち8名の選手は南京に来る途中に辮髪を切っていたのだが、孫は家族の反対で切るのを思いとどまっていたのである⁶。

スポーツの競技会に辮髪は不似合いである。というのも、競技会は西洋的な雰囲気にも包まれていたからである。第1回全国運動会の役員構成は西洋人と中国人が半々であったが、実質的な運営者は上海 YMCA の体育主事エクスナー（Max J. Exner 晏士納）であった。大会の公式言語は英語だった。会場でのアナウンスは中国語と英語でおこなわれ、距離や重量はすべて英米式であった⁷。『時報』によれば、孫宝信が辮髪をひっ

² 有山輝雄『甲子園野球と日本人：メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年、20頁。

³ 来会理（David W. Lyon）「中国青年会早期史実之回憶」『近代史資料』総109号、2004年8月、123頁。

⁴ 拙稿「上海セント・ジョンス大学スポーツ小史（1890-1925）」森時彦編『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所、2013年。

⁵ 大会のプログラムには「First Chinese National Athletic Sports」と表記される。『申報』1910年10月16日は「全国連合大運動会」と呼んでいる。

⁶ Wu Chih-kang, “The Influence of the YMCA on the Development of Physical Education in China,” *dissertation*, University of Michigan, 1956, p. 127, 『時報』1910年10月22日。このとき華北代表選手を引率したのは、張伯苓、王夢臣、Roscoe M. Herseyであった。

⁷ 『時報』1910年10月21日。7月に大会への参加を呼びかける中国語の通告書が出されている。

かけてバーを落としたとき、会場では「立刻割去 Cut it off at on [sic]」という声があがったという⁸。ちなみにエクスナーは1年前に、棒高跳のさい髷が原因でバーが落ちた場合は失格としないとするルールを作るべきだと主張していた。あえて髷を固定せよと言わなかったのは、髷を巻き付けて固定するのはクーリーだけだと中国人が考えていたからである⁹。閉会式では、感極まった選手たちの歌声がホールに満ちたが、その歌詞は西洋のものであり、さらにはイギリス女王の健康を言祝ぐものさえあった。これに対して、中国の国歌が演奏されたときには、だれもがそれを国歌と認識できず、起立敬礼を促されたものの、だれも国歌を唱うことができず、互いに顔を見合わせてどうしたらよいかわからない有様だった¹⁰。中華 YMCA 全国国協会執事の鄭富灼は閉会式の状況を次のように描写した。「彼らの歌声や叫び声は、西洋での学部生時代の同種の行事のことを我々に思い出させてくれる。彼らは明らかに芸術や科学以外にも西洋の大学の精神を吸収しているのだ¹¹」。鄭にカリフォルニア大学での学部生時代を思い起こさせるほど、閉会式の情景は西洋的であった。

全国運動会の学校対抗競技で優勝したセント・ジョンズ大学は、黎明期の中国スポーツ界を牽引する存在だったが、校内では日常会話までもが英語でなされていた¹²。胡詒

る（『申報』1910年7月17日）。通告書には競技種目として「運動」「籃球」「杖球」が挙げられているが、実際に開催された種目から判断して「杖球」はサッカーを指すと考えられる。明らかな誤訳だが、運営は英語でなされていたので、問題にはならなかったのだろう。天津 YMCA の『星期報』10期、1910年9月でも「杖球」となっている。

⁸ 『時報』1910年10月22日。原文は「其間有呼立刻割去 Cut it off at on」。王振亜編『旧中国体育見聞』人民体育出版社、1987年、136頁はこれを西洋人審判の発言とする。「其間」の指すところを断定するのは難しいが、いずれにせよ英語が通用していたことは確かである。

⁹ Max J. Exner, "Report of M. J. Exner (October 1908-December 1909)," *YMCA Archives*, Minnesota University. この報告はYMCAの主事が毎年9月末に提出する正式のものではなく、エクスナーの個人的事情により1909年末に提出されたもので、陳肅、達格瑪・蓋茨（Dagmar Getz）、大衛・克勞森（David Klaassen）整理、趙炬明審校『美国明尼蘇達大学図書館蔵基督教男青年会檔案：中国年度報告（1896-1949）：附國際幹事小伝及会所小史』全20巻、広西師範大学出版社、2012年（以下、『中国年度報告』と略す）には収録されていない。

¹⁰ 『時報』1910年10月23日。小野寺史郎『国旗・国歌・国慶：ナショナリズムとシンボルの中国近代史』東京大学出版会、2011年、123-124頁はこの史料を引きつつ、清末の国歌をめぐる状況を論じている。

¹¹ Fong F. Sec（鄭富灼）, "The First National Athletic Meet," *China's Young Men*, January, 1911.

¹² 拙稿「『東亜病夫』とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」狭間直樹、石川禎浩編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年。

穀は同校卒業後、ライバル校である南洋公学（校名が頻繁に変わるので、以下「南洋」に統一）で英語を教えることになったが、スポーツの経験を買われて体操教師を兼任した。もちろん、体操の号令はすべて英語だった¹³。徐一冰は1901年前後の上海の体育について、体操を担当したのは英文教員が多かったこと、なかでもセント・ジョンズの卒業生が多く、教材は徒手、哑鈴、兵式の各体操、および「網球、足球、棒球、競走、跳高等の運動」^{スポーツ}であったと記している¹⁴。

1913年2月、マニラで極東オリンピック大会が開催された。中国の選手の大半はミッションスクールの学生で、潇洒な服装に身を包み、流暢な英語を話すことができた。選手たちは言葉づかいから外見にいたるまで完全に西洋化していた。地元メディアは「中国の住民であるとは思えない」と報じた¹⁵。というのも、彼らが目にするマニラの華僑たちは概して貧しく、また富裕なものでも、スペイン語は話せても（新しい支配者の言語である）英語を話せるものは少なかったからである。中国の選手団は日本の選手団と比べても際だっていた。日本の選手は学生服を着ており、そしておそらくその多くは英語をほとんどしゃべることができなかった¹⁶。

1915年5月、上海で開かれた第2回極東選手権競技大会（「極東オリンピック」から改称。以下、極東大会と略す）を取材した日本人記者は、「支那人の態度は少しも支那人らしい因循な処がない。彼等の競技が観客に与える感化は定めし絶大なものがあつたらう。外国人の教育を受けた支那人の心的並に体的に変化した現象は軽々に見逃すことが出来ない」と、これまで抱いていた「中国人像」とのギャップに驚いた¹⁷。いっぽうで彼は中国人が互いに英語でしゃべるのを見てしゃくにさわりを感じた。ここには、後進国であるはずの中国に、日本以上の「文明国」的な情景をみた日本人記者の羨望ととまどいが率直に表明されている。彼は極東大会を「まるで西洋人の運動会だ、マニラの米国人の運動会が出店を上海に張つた位の処だ」と評し、それを中国人自身

¹³ 俞子夷「蔡元培与光復会草創時期」中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『辛亥革命回憶録』7集、文史資料出版社、1981年、510頁。

¹⁴ 徐一冰「二十年来体操談」『体育週報』週年紀念号、1920年1月5日。

¹⁵ *The Manila Times*, January 30, 1913.

¹⁶ 1905年に早稲田の野球部がアメリカ遠征をした際、学生服をきた選手たちは兵隊や楽隊と間違えられたという（池井優『白球太平洋を渡る：日米野球交流史』中央公論社、1976年、58頁）。

¹⁷ 『東京朝日新聞』1915年5月22日。

ではなくアメリカ人によって成し遂げられた事業だと解釈することで、このとまどいを覆い隠した。実際、この大会はYMCA 体育主事クロッカー（John H. Crocker 柯楽克）が中心となって運営され、イギリス人にさえ、中国的というよりはアメリカ的と感じさせるような大会であった¹⁸。

中国のスポーツ界で英語がひろく用いられた最大の原因は、競技会がおもに外国人によって運営されていたことにある。くわえて、中国語は方言の違いが大きいという実際的な問題もあった。1917年、寰球中国学生会が東京で開かれる極東大会に参加する選手の送別会を開いた。YMCAの李登輝は南北の選手が直接会話することができないという弊を避けるために、国語を重視すべきだと演説した¹⁹。しかし、実際には英語のほうが便利だった。スポーツ用語やルールはほとんどが英語だったし、フィリピンや日本の役員選手とのコミュニケーションも英語でなされた。1919年5月、マニラで開かれた極東大会に参加した中国代表が帰途に香港に立ち寄ったさい、地元の体育協会が歓迎会を開いたが、協会の代表は「華北の方言」に不慣れなため、英語で歓迎の辞を述べた²⁰。

英語の使用には有利な点もあった。それは西洋人による指導を容易にし、スポーツのレベルを向上させることに大いに貢献した。葉維麗はアメリカの中国人留学生についての研究のなかで、留学生たちは英語の使用やアメリカの大学への帰属意識によって、伝統的な地域区分を解体され、中国の国民としての意識が生まれたと論じた²¹。まさに同様のことがスポーツにもあてはまる。第1回全国運動会は、エクスナーによれば、地域的感情を打ち壊し、ナショナルスピリットの成長を助けたという²²。「英語を話す中国人」選手たちは、スポーツを通じて「国民」意識を育んだ。そしてそれは当然、主権意識を高めることになるであろう。

¹⁸ J. Wong-Quincey, "The Far Eastern Championship Games," *China's Young Men*, June, 1915. クロッカーはできるだけ中国人を前面に出すように心がけたつもりであった（Alfred H. Swan, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8巻、331頁)）。

¹⁹ 『申報』1917年4月26日。

²⁰ *South China Morning Post*, May 21, 1919.

²¹ Ye Weili, *Seeking Modernity in China's Name: Chinese Students in the United States, 1900-1927*, Stanford University Press, 2001, pp. 28-29.

²² Max J. Exner, "Report of M. J. Exner (1909-1910)," (『中国年度報告』4巻、160頁)。

日本式の運動会と体操

1904 年 1 月、奏定学堂章程が公布され、近代的学校制度が正式に導入された。新しい学制は日本をモデルとし、「体操」が正規科目に採用された。体操の内容は遊戯、普通体操、兵操であった。当時の「体操」という言葉は、日本でも中国でも、gymnastics だけでなく、スポーツを含む体育全般を指す言葉であった²³。体操のなかで最も重視されたのが高等小学堂以上の男子に課された兵操である。というのも、張之洞によれば、「日本では森有礼がドイツにならって全国の大小学堂で兵操を習わせたことが、今日の日本の兵力の強さをもたらした」からである²⁴。体操は「軍国民（軍人＝国民）」の養成に不可欠の手段とみなされていた²⁵。

日本式体操の導入にともない、体操の現場に大量の日本語が流入した。清末の中国には多くのお雇い日本人教師がいたが（約 500 ～ 600 名）、このうち体操を教えていたのは約 35 名（うち 8 名が女性）であった。その半数弱が警察や陸軍関係の学校に派遣されたが、山西、浙江、江蘇、湖北などでは師範系の学校にも派遣された²⁶。彼らが日本語で授業をしたのは言うまでもない。

中国人留学生の果たした役割も見逃すことはできない。多くの中国人留学生を受け入れた弘文学院の創設者で、講道館柔道の創始者でもある嘉納治五郎は、中国人留学生に対して、智育、徳育とともに体育も重視すべきであると語っていた²⁷。実際、弘文学院では普通科の 1 年から 3 年まで週 5 時間体操が課されていた。1905 年 4 月 30 日には、弘文学院の留学生が運動会を開催し、全校生約 800 名が参加した。留学生たちは日本の学校が主催する運動会にも参加した。1903 年 3 月 29 日には、陸軍士官学校の予備校である成城学校で開かれた運動会で、万国旗のなかに清国の国旗がなかった

²³ 中国における「体操」の初出は、いまのところ、日本の学校制度を紹介した「振興学校論」（『申報』1890 年 6 月 23 日）と考えられている。羅時銘主編『中国体育通史』3 卷、人民体育出版社、2008 年、98 頁は同記事を 1890 年 5 月 7 日とするが、旧暦と新暦を混同している。

²⁴ 張之洞「致瞿子玖」（光緒 29 年 11 月 8 日）、趙德馨主編『張之洞全集』12 冊、武漢出版社、2008 年、99 頁。

²⁵ 拙稿「軍隊と社会のはざままで：日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校教練」田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015 年。

²⁶ 賈明学「清末来華日本体育教習研究」『体育文化導刊』2015 年 7 月。

²⁷ 「支那教育問題」『新民叢報』23 号、1902 年 12 月 30 日。

ことから、中国人留學生が運動会参加を拒否するという事件も起こっている²⁸。ちなみにこの記事を報じた『湖北学生界』には、創刊号から「体操器械、運動器具各種、文房用品」の広告が掲載されており、スポーツへの関心を窺うことができる。このほか、中国留學生会館には体操器械が設置されており、1906年春に設立された留日中華YMCAもスポーツ事業を展開していた²⁹。留學生のなかには体操を専攻するものもいた。尚大鵬によれば、日本体育会体操学校は1903年に最初の中国人留學生を迎え、1908年には80名が在籍していた³⁰。このようにさまざまな形で体操やスポーツを経験した留學生のなかには、弘文学院に学んだあと、湖南省長沙の明德学堂で歴史と体操を教えた黄興のように、帰国後に体操教師となるものがいた。

清末の体操学校や体操専修科のほとんどは日本留学経験者の手によって創設され、また日本留学経験者を教師に迎えていた³¹。最も有名で、かつ影響力が大きかった中国体操学校は、1907年に徐一冰、王季魯、徐傳霖が創設し、1927年までに1500名以上の卒業生を送り出した。同校には女子部が設けられ(のち「中国女子体操学校」と改称)、日本体操学校女子部をモデルとしていた。王季魯の留學歷は不明だが、徐一冰、徐傳霖、湯劍娥(徐傳霖の妻で女子部教務主任)は日本留学経験者であった。これらの体操学校や体操専修科で日本式体操を習得した学生たちは赴任先の学校で日本式体操を教えた。成都の師範養成所を卒業したという郭沫若の体操教師もその一人であった。郭によれば、その体操教師は「洋操」を教えるのに、日本語の号令をそのまま用いた。たとえば「立正(氣をつけ)」は「チーアフツコー」であり、「一、二、三」は「シー、フー、ミー」であった。生徒たちはこれらの号令がどういう意味であるかもわからず、どこの国の言葉であるかさえないまま、号令の内容を体で理解し、実践していた³²。

²⁸ 「留学記録 成城学校留學生罷運動会」『湖北学生界』4期、1903年4月27日。

²⁹ 酒井順一郎『清国人日本留學生の言語文化接触：相互誤解の日中教育文化交流』ひつじ書房、2010年、76-79頁、肖冲「清末留日學生对“欧化”的日本体育传入中国所起的作用」『体育文史』1987年3期、尚大鵬「日本体育会体操学校における清国留學生：雑誌『体育』より」『教育学研究紀要』46巻、2000年。

³⁰ 尚大鵬「日本体育会体操学校における清国留學生」。

³¹ Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation: A History of Sport and Physical Culture in Republican China*, University of California Press, 2004, p. 11 によれば、清末には21の体操学校、体操専修科が設立された。

³² 四川大学中文系郭沫若選集編選組編『郭沫若選集』1巻、四川人民出版社、43頁。

体操の教材もほとんどが日本の教材の翻訳だった³³。1900年に湖北武備学堂などから刊行された『普通体操摘要』がこの手の翻訳の最初のもので、原著は坪井玄道、田中盛業編『普通体操法』（大日本図書、1898年）であった³⁴。1906年に学部が指定した暫定的体操教科書のうち、高等小学校用の4点すべてが日本の書籍の翻訳で³⁵、そのうち2点が川瀬元九郎、手島儀太郎の共編書であった。川瀬は1892年にボストン大学医学部に留学、帰国後に当時最新のスウェーデン体操を紹介した人物である（スウェーデン体操は1913年の「学校体操教授要目」で正式に導入される³⁶）。日本の最先端の体操が導入されたわけだが、これをきちんと教えることのできた教師はほとんどいなかったであろう。

徐一冰が指摘するように、近代的学校制度が導入された直後に体操教師のポストを埋めたのは「一般の無知識で無道德の營弁の兵士」であった³⁷。徐は兵操に反対する立場から、軍事的な体操と教育的な体操を区別するが、当時の体操（なかでも兵操）は一般に軍隊での体操と明確に区別できるものではなかった³⁸。清朝の新軍は最初ヨーロッパの軍隊を模範としてつくられたが、1898年の張之洞の湖北新軍を皮切りに、1901年以降、新軍の日本式への転換が進んだ³⁹。最初に翻訳された日本の体操教材が湖北武備学堂から刊行されたのは、湖北新軍で日本式の体操がいちはやく実践されてい

³³ 郎淨「晚清体操教科書之書目鉤沈及簡析」『体育文化導刊』2014年8月。

³⁴ 同書は中学校、師範学校用教科書として編纂された『普通体操法』文部省編輯局、1887年の増補訂正版である。訳者の王肇鉉は公使館随員として1885年から1887年と1890年から1892年に日本に滞在した経験がある。1903年には、坪井、田中の『小学普通体操法』が丁錦の翻訳により『蒙学体操教科書』として上海文明書局から刊行されている。

³⁵ 『大清新法令』7類、教育3、教科書。初等小学校用は、天津官報局印刷、直隸学務処発行の『幼学体操法』である（未見）。高等小学用は、①『高等小学遊戯法教科書』文明書局出版、1903年（山本武編『新案遊戯法』松村九兵衛、1897年の翻訳）、②『普通体操法教科書』作新社、1903年（坪井玄道、田中盛業編『普通体操法』大日本図書、1898年の翻訳）、③『教育必需瑞典式体操初歩』文明書局、1906年（川瀬元九郎、手島儀太郎編『瑞典式体操初歩』大日本図書、1906年の翻訳）、④『新撰小学校体操法』文明書局、1906年（川瀬元九郎、手島儀太郎編『新撰小学校体操法』大日本図書、1904年の翻訳）である。

³⁶ 頼住一昭「日本におけるスウェーデン体操に関する一考察：「リング主義」の採用と定着について」『愛知教育大学研究報告』芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編、61巻、2012年3月。

³⁷ 徐一冰「二十年来体操談」。

³⁸ これは日本でも同じで、退役軍人は体操教師の重要な供給源であった。

³⁹ 杜宇「論清末新軍軍操日本化的歷程及其影響」修士論文、湖北大学、2014年。

たからである。近代的学校制度が導入されたとき、日本式の体操を教えることのできる人材は軍隊にしかいなかった。

これら官立の学校や中国人の運営する学校は、英米式の競技会ではなく、日本式の運動会を開催した⁴⁰。そもそも「運動会」という言葉は、当初はもっぱら日本の運動会を紹介するのに用いられた。1889年に刊行された傅雲龍『遊歴日本図経余記』に隅田川の競艇を「帝国大学運動会」と紹介したのが「運動会」の初出とされる⁴¹。1891年の『申報』は日本の運動会と遠足について、前者は「教員が生徒を引きつれて整列して某所に出かけ、技芸を試み、遊び戯れること」で、「運動会」より遠い所へ行くのが「遠足」であると説明している。ここに見える日本の「運動会」は最初期のもので、学校の校庭で開かれる運動会は1900年以降に登場する⁴²。『申報』が報じた最初の中国人による運動会は、1903年に湖北師範学堂で開かれた運動会である。湖広総督端方が見守るなか、全学生60名あまりが旗取、綱引、二人三脚、算術競争などの競技に参加した。総監督（校長）の梁鼎芬は平素より兵操を重視し、いつも現場に足を運んでいた。運動会を取り仕切ったのは総教習の戸野周二郎であった⁴³。

1905年には、『申報』に運動会に関する記事が数多く掲載された。そうした記事の一つで、「南洋」の運動会を観戦した『申報』の記者は、井上哲次郎、元良勇次郎、大町桂月の言葉を引いて運動会の意義を明らかにし、知人から聞いた日本の高等師範学校や東京府立一中、弘文学院の運動会の様子を語ったうえで、「南洋」の運動会が今後発展していけば、日本のそれと対抗できるようになるだろうと記している。じつは「南洋」の運動会は、日本式ではなく英米式で、軍装競争のような種目もあったが、多くは陸上競技（しかも220ヤードや880ヤードの正式の距離）であった⁴⁴。というのも、「南

⁴⁰ 中国語で「運動会」は英米式のスポーツ競技会を含むが、本稿では日本式に限定して用いる。

⁴¹ 香港中国語文学会『近現代漢語新詞源』漢語大詞典出版社、2001年、黄河清編著、姚德懷審定『近現代辞源』上海辞書出版社、2010年など。

⁴² 平田宗史「わが国の運動会の歴史」吉見俊哉ほか『運動会と日本近代』青弓社、1999年。

⁴³ 『申報』1903年6月6、14日、陳英才「回憶兩湖書院」『湖北文史資料』8輯、1987年。この運動会は官立学校で開かれた最初期の事例の一つと考えられる。羅時銘主編『中国体育通史』3巻、140頁は官立学校の最初の運動会を1904年の保定師範学堂としている。なお、『申報』は「戸野周三郎」とするが誤りである。東京高等師範学校教授だった戸野は1902年に湖北師範学堂総教習となり、1905年に東京市教育課長に転じた。

⁴⁴ 『申報』1905年5月7日。

洋」でスポーツを推進していたのはアメリカ人ファーガソン (John C. Ferguson 福開森) だったからである⁴⁵。このエピソードは、当時の中国人にとって、英米式の競技会と日本式の運動会の違いがさほど重要ではなかったことを物語っている。彼らにとって、それらはいずれも富国強兵の手段であった。

同年5月27、28日に北京の京師大学堂で開かれた運動会は、日本人教師が運営したこともあってか、メートル法を用いていた点が興味深い⁴⁶。翌1906年の第2回運動会では、総監督の李家駒が体操用の帽子をかぶって陣頭指揮に立った。この点について、『大公報』は、「第1回の主権は、わが中国人がみずからこれを握っていたであろうか、そうではなかった」と主権の問題としてとらえ、前回以上の成功を収めたことを祝した。各国公使や政府官僚など来賓が多数詰めかけた3日目は、李は袍褂を着て応対にあたったが、「職員競走」のさいには袍褂を脱いで力走した。運動場の入場門には「尚武」の扁額が掲げられ、中央に立てられた柱には龍旗（清の国旗）が翻り、そこから万国旗をつるした紐が四方に伸びていた。運動会は皇太后と皇帝の聖寿無疆と京師大学堂の長久を祈念して終了した⁴⁷。

1906年1月10日から14日にかけて広州の東較場で举行された「広東省大運動会」は、省学務処が主催し、学務公所所長姚百懷が会長をつとめ、省内約50校から1200名の学生が参加するという大規模な運動会だった。参加者の多くは辮髪を頭に巻き付けていた。跳躍の審判をしていた張姓の教師が断髪していることが学生の指摘によって発覚したとき、選手や観客が大騒ぎし、会場が大混乱した。「Cut it off at on」という叫び声があがった第1回全国運動会との違いは明らかである。とはいえ、会場の写真を見ると、洋式の軍服を着ているもの、洋傘をさすものが少なからずおり、伝統的なお祭りや縁日の雰囲気とはまるで違っていたことがわかる⁴⁸。種目は「二人三足走、負重競走、徒手跳高、跳遠、撐竿跳」などの競技で構成され、体操や武術はなかった。た

⁴⁵ 拙稿「上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史」。

⁴⁶ 『申報』1905年6月5、11日。

⁴⁷ 『大公報』1906年5月3、4、6日。

⁴⁸ 広東省博物館 HP (http://www.gdmuseum.com/edu_text.php?blogid=1538&title=&classid=73)、李潤波主編『中国体育百年図志』中国華僑出版社、2008年、27頁。洋式軍服の意味については、拙稿「辮髪と軍服：清末の軍人と男性性の再構築」『アジア遊学』2015年11月号を参照。

だし競技といっても順位を争うだけで、距離や時間、そして記録にはほとんど注意が払われなかった。このようにローカルな場だけで完結する競技は、西洋のルールや言葉が必要としない⁴⁹。

1907年、南京で寧垣学界第一次連合運動会が開催され、80以上の学校が参加した。種目は、競走、武装競技、体操実演、遊戯、球技、舞踏、武術、馬術に分かれていた。球技の内容は「踢球競争、球戦、列国争球」で、いわゆる近代スポーツではない。競走はほとんどが「三足競走」「奪旗競走」の類であり、正式な陸上競技ではなかった。遊戯には「恢復路権」のように愛国心を高めるものや、「要塞占領」「飛遁公文」のように軍事的能力を高めるものが含まれていた⁵⁰。

以上見てきたように、英米式の競技会と日本式の運動会の間には明確な違いがある。競技会はミッションスクールを主たる対象として西洋人が主催し、種目は近代スポーツが主で、会場では英語が通用し、コスモポリタンな雰囲気包まれていた。そして安息日である日曜日には決して開かれなかった。これに対して、運動会は官立学校を主たる対象として中国人（政府、教育団体）が主催し、政府関係者が来賓として招かれた。種目は体操や遊戯、各種の競走で、軍事主義、ナショナリズムに彩られていた。そして運動会は日曜日に開かれることが多かった（連合運動会はしばしば平日に開かれた）。競技会と運動会はいわば中国の近代化の2通りの道を象徴するものであったが、競技会のほうは依然として一般社会から隔離されており、その影響力は運動会に遠く及ばなかった。とはいえ、スポーツの実践そのものは競技会という場を越えて広がっており、英語との結びつきは薄れていた。蘇州公立第一中学堂に通っていた葉聖陶は、同級生がテニスをする様子を眺めていた。その光景は彼を「わが身がこの百病叢生の中国、あるいは老大の中国にあるのではなく、一躍雄健な少年になった」ような気に

⁴⁹ 運動会は暴力的な審判に反発した学生が次々と退場するなかで閉幕した（向勤「晚清時期広東第一次省運會」『嶺南文史』1993年2期、広東省地方史志編纂委員會編『広東省志 体育志』広東人民出版社、2001年、642頁、徐文勇「1906年広東省大運動会始末述略」『体育学刊』15巻10期、2008年10月）。もちろん、Three-legged Raceのような娯楽的種目は英米でも、中国のミッションスクールでもよく見られたが、複数の学校が参加する運動会ではほとんど見られなかった。

⁵⁰ 中華人民共和国体育運動委員會運動技術委員會編『中国体育史參考資料』4輯、1958年6月、72-73頁。なお、この記事は「光緒丁未寧垣学界第一次連合運動会次序表」に依拠して書かれたもので、主催者や日時などの詳細は不明である。

させた。スポーツは彼を中国社会から遊離させ、超越的な世界＝未来の富強な中国を
かいま見せてくれたのである⁵¹。

第二章 デモクラシーとスポーツ

YMCA 体育主事の挑戦

近代的学校制度導入以降、学校体育の現場では日本式の体操が実施され、軍国民養成の重要な手段とみなされていた。これに対して、近代的スポーツを実践していたのは、ミッションスクールと非ミッション系の一部の学校に限られていた。このような状況を危惧したのが YMCA の外国人体育主事たちであった。スポーツを通じてキリスト教の普及をはかる彼らにとって、日本式の体操は道徳的にも問題があった⁵²。YMCA 体育主事たちは、政府や教育界との関係強化、体育指導者育成、体育書籍の翻訳などを通して、体育界の主導権を握ろうとした。

政府との関係強化に最初に成功したのは、北京 YMCA だった。1912 年に結成された北京体育競進会（Peking Athletic Association）は副総統黎元洪を名誉会長に据えた。会の実質的運営は YMCA 体育主事のホーランド（Amos N. Hoagland 侯克倫）と南開学校の学生郭毓彬に任されていたが、実権を握っていたのは、言うまでもなくホーランドであった。翌 1913 年 5 月に第 1 回華北運動会を開くにあたって⁵³、ホーランドと郭が政府との交渉をおこない、競技会に関心を示した袁世凱が団体と個人の優勝者にそれぞれ大小の銀杯を寄贈することになった。その 1 年後、北京体育競進会の主催で第 2 回全国運動会が開かれ、袁世凱、黎元洪、徐世昌らが閉会式に言葉を寄せた。

上海の YMCA 体育関係者と中国の教育界との関係は、1914 年 11 月下旬にクロッカーが江蘇省教育会主催の講演大会に招かれたことに始まる⁵⁴。この講演は、同月初に南京

⁵¹ 葉聖陶著、葉至善、葉至美、葉至誠編『葉聖陶集』19 卷、江蘇教育出版社、1994 年、32 頁、宣統 3 年 8 月 3 日（1911 年 9 月 24 日）。ここでいう百病叢生の中国と老大の中国は「病夫老大」を意識したものと思われる。「病夫」とスポーツの関係については拙稿「『東亞病夫』と近代中国」村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』（近刊）を参照。

⁵² Max J. Exner, "Report of M. J. Exner (1910-1911)," (『中国年度報告』4 卷、419 頁)。

⁵³ 「華北運動会」は後の呼称で、『申報』1913 年 5 月 27 日は「直晋各校連合運動会」とする。

⁵⁴ John H. Crocker, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8 卷、

で開かれた江蘇省立学校連合運動会を契機に体育への関心が高まるなかでおこなわれた。江蘇省巡按使（民政長官）の齊耀琳は経費 800 元を支給しただけでなく、開会式に出席し、「武力なくして国は存続できず、雄健なくして事をなすことはできない」と挨拶した⁵⁵。省教科長盧殿虎が事務を、中国体操学校校長徐一冰が総司令として大会の進行を取り仕切った⁵⁶。プログラムは体操と拳術が主体であったが、100 ヤード走や棒高跳など競技スポーツもいくつか含まれていた。大会 2 日目に開かれた会議で体育研究会の設立が発起され、その後、江蘇省教育会附設体育研究会が誕生し、会長には張士一、副会長には徐傳霖が就任した⁵⁷。

翌 1915 年 5 月に第 2 回極東大会を成功させたことは YMCA の威信を大いに高めた⁵⁸。おりしも、第一次世界大戦の勃発や 21 か条要求の受諾などの影響により、教育界では軍国民教育への関心が高まっていた。極東大会の直前に開催された全国教育連合会は軍国民教育実施方案を提出したし、6 月に袁希洛は「このたび中日外交の屈辱的条約が発生して以来、国家の前途は危険きわまりなく、わが国は自衛のために軍国民教育主義を採らざるをえない」として、公共体育場の設置を江蘇省政府に求めていた⁵⁹。齊耀琳は各県に半年以内に公共体育場を設置し、その指導者候補を上海に送り訓練を受けさせるよう指示した。そもそも公共体育場とは、YMCA が推進していたプレイグラウンドのことだったから、YMCA が指導者の訓練を任されたのは当然の成り行きだった⁶⁰。教育部も同年 10 月に、各校に体育の組織と課外運動部に力を入れること、各巡按使などに省城に公衆運動場を設置することを指示した⁶¹。翌月、蘇州で開かれた

226 頁）、『申報』1914 年 11 月 24 日。

⁵⁵ 『申報』1914 年 11 月 6 日。

⁵⁶ 袁宗沢「江蘇省運動会史略」『体育研究与通訊』1 卷 2 号、1933 年 3 月。

⁵⁷ 公短「論江蘇省立学校第一次連合運動会」『中華教育界』4 卷 1 号、1915 年 1 月、『申報』1915 年 7 月 17 日。男女ともに参加する運動会であった点は注目される。ただし、競技スポーツは男子のみであった。

⁵⁸ 江蘇省教育会は極東大会を観戦にいくよう事前に通告を出していた（『申報』1915 年 5 月 2 日）。

⁵⁹ 「会報 文牘 袁君希洛請於省内設立公共体育場建議書」『教育研究』24 期、1915 年 8 月 10 日。

⁶⁰ Charles H. McCloy, "Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8 卷、90 頁)、John H. Crocker, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8 卷、226 頁)、Alfred H. Swan, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8 卷、332 頁)。

⁶¹ 「教育部咨各学校組織課外運動併於省城内籌設公衆運動場文」『教育雜誌』7 卷 12 号、1915 年

第2回江蘇省立学校連合運動会では、スワンが審判として参加した。また来賓として蘇州近辺のミッションスクールが参加した。来賓の競技は別立てであったが、ミッションスクール主体の英米式の競技会と官立学校主体の日本式の運動会が結びついたという点で画期的だった⁶²。1916年11月に揚州で開かれた第3回江蘇省立学校連合運動会では、YMCA 体育主事マクロイ (Charles H. McCloy 麥克樂) が審判長をつとめた。競技運動の数が増え、これまで主流だった体操や武術に取って代わった⁶³。学校体育の世界を支配していた軍国民教育の影響をいくらか殺ぐことに成功したといえよう。

こうして、YMCA は江蘇省政府や江蘇省教育会との関係を深めるなかで、学校体育への影響力を強めていった⁶⁴。マクロイによれば、中国には「50人を50年間忙しくさせるだけの仕事の手元にある」が、人手不足のためにせつかくのチャンスを生かし切れず、「政府当局との関係を損なわずに彼らの要求を拒否するのは困難になりつつある」という歯がゆい状態にあった⁶⁵。もし我々がしなければ、日本人がするだろう、とマクロイは警告した。マクロイは体育主事の派遣をたえず求め続けたが、アメリカの第一次世界大戦参戦後、YMCA はヨーロッパでの戦時事業を優先したため、マクロイの要請に応じることができなかった⁶⁶。

体育指導者の養成は、日本式体操を実質的に排除するうえで、決定的に重要な事業であった。YMCA は独自に訓練学校を運営しただけでなく、1915年11月に開設された江蘇省教育会附設体育研究会体育伝習所にも関わった⁶⁷。翌1916年初、南京高等師範学校体育専修科が発足し、春に39名の入学生を迎えた。同専修科は高等教育機関に設

12月。

⁶² 華北は一步先んじており、第1回華北運動会には官立学校とミッションスクールが参加している。

⁶³ 侯鴻鑑「對於江蘇第三屆連合運動會感言」『教育雜誌』8巻11号、1916年11月。

⁶⁴ 江蘇省教育会については、谷秀青『清末民初江蘇省教育会研究』広西師範大学出版社、2009年を参照。

⁶⁵ Charles H. McCloy, "Report for the Year Ending September 30, 1915," (『中国年度報告』8巻、94-95頁)。

⁶⁶ Charles H. McCloy, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1916," (『中国年度報告』9巻、242頁)。マクロイは日本人の影響力を高く見積もりすぎているように思われるが、これはYMCA 本部に対して予算と人員の増加を求めるための戦略だったかもしれない。

⁶⁷ マクロイは体育伝習所で週2時間の講義を担当していた (Charles H. McCloy, "Annual Report Letter of C. H. McCloy (1917-1918)," (『中国年度報告』12巻、416頁))。

置された最初の体育指導者養成コースであった。YMCA はかねてより同専修科主任の人選を依頼されていたが、適任者が見つからず、たまたま南京で語学学習をしていたマクロイが就任した⁶⁸。その後、北京高等師範学校にも体育専修科が設けられ、国際 YMCA 訓練学校出身で、もと清華学校体育主任のショーメイカー（Arthur Shoemaker 舒美柯）が招聘された。こうして、中等以上の教育機関の体育教師や社会体育の指導者を養成する南北2つの学校に YMCA 的スポーツの影響が及んだ⁶⁹。1917年に張士一、郝伯陽、徐一冰らの発起で体育教員会が組織されたが、名誉顧問のマクロイによれば、最初の会議に出席した100名以上の会員のうち、4分の3は YMCA のもとで訓練を受けた経験があった⁷⁰。この自己評価の当否はさておき、少なくとも江蘇省の体育界で YMCA が大きな影響力を持っていたことは疑いようがない。とはいっても、マクロイが主任をつとめる南京高等師範学校体育専修科でさえ、その趣旨の一つとして、軍事常識を兼有し軍国民主義を発展させることを挙げているように、軍国民教育から逃れることはできなかった⁷¹。マクロイは体育界の主導権を握ることを優先し、軍国民教育には目をつぶったのだろう。

そもそも、数人の YMCA 体育主事が養成しうる体育指導者の数はたかが知れており、当時の中国体育界の需要に応えることはとうてい不可能であった。マクロイは来華して最初の報告書で、適切な中国語の文献の不足を最大の問題であると指摘していた⁷²。それは「Play for Everybody」を掲げ、可能な限り多くの中国人にスポーツを広めるべく、

⁶⁸ Charles H. McCloy, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1916," (『中国年度報告』9巻、240頁)。マクロイの主任就任は臨時的な措置であり、1917年秋よりオーバーリン大学出身のジオーク（Charles D. Giaque 祁屋克）が主任となった（Charles H. McCloy, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1917," (『中国年度報告』11巻、67頁)）。尚大鵬「民国初期における高等師範学校体育専修科に関する一考察：南京高等師範学校体育専修科を中心として」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』48巻1部、2002年がマクロイのあと、「ヨッピンス（饒永斯）が体育科主任に就任した」とするのは誤りである。ロビンズ（B. H. Robbins）はジオークの後任であった。

⁶⁹ もっとも、ショーメイカーは YMCA の組織に属していたわけではない。

⁷⁰ Charles H. McCloy, "Annual Report Letter of C. H. McCloy (1917-1918)," (『中国年度報告』12巻、415頁)。

⁷¹ 『申報』1916年1月24日。

⁷² Charles H. McCloy, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1914," (『中国年度報告』7巻、97頁)、「Report of the Year Ending September 30, 1915,' (『中国年度報告』8巻、94頁)。

官立学校への進出や中国人体育指導者の養成を図っていた YMCA の体育事業のボトルネックとなっていた。

YMCA が最初に中国語で刊行した体育関係書籍は、第 1 回極東大会直前の 1913 年 1 月に刊行した『隊球遊戲規例』であろう。『隊球遊戲規例』は極東オリンピック委員会採用のバレーボール規則を翻訳した小冊子で、英語の原文と中国語の翻訳が掲載されている。極東大会の競技のうち、中国で最も馴染みがうすいバレーボールについて、まずルールを翻訳したのだろう。1914 年から 1916 年にかけて、陸上競技、バスケットボール、テニス、サッカー、野球の規則集が次々と翻訳された。いずれも YMCA の関係者による翻訳で、バスケットボール、テニス、サッカーは南開大学の学生郭毓彬と高宝寿が訳した⁷³。なかでも注目すべきは、1917 年 9 月に商務印書館から刊行された遠東運動会中国委員会編『運動技術概要』である。同書は体育教師向けに編まれた規則集・便覧で、極東体育協会や中国北部連合運動会の章程、アマチュア規定やスポーツマン精神の説明、遊戯、舞踏、柔軟体操の実施要領、陸上競技、バレーボールなどの規則、極東大会の概略、第 3 回極東大会の報告で構成される。柔軟体操に関する用語は『体操積名』に、バレーボールの規則は『隊球規例』に依拠するなど、本書は YMCA 系の体育出版物の集成というべき性格をもつ⁷⁴。1 冊で体育・スポーツの基本的知識を知ることができる便利な書物であったためか、1922 年 1 月までに 6 版を重ねるほどの人気であった。1910 年代から 1920 年代にかけて刊行された中国語版の規則集の一覧(表 2)から、この分野で YMCA の果たした重要な役割を見てとることができよう。規則のことでいざこざが生じると、みな YMCA に指示を仰いだ⁷⁵。規則集の刊行は、スポーツ界における YMCA の権威を大いに高めたのである。

翻訳事業の最大の功労者はマクロイであった。表 3 は 1910 年代にマクロイ関わっ

⁷³ 郭毓彬は 1915 年の極東大会に出場し 800 ヤード走と 1 マイル走で優勝した。1918 年にアメリカに留学し生物学を学び、帰国後、東呉大学教授などを歴任した。高宝寿(高仁山)は 1917 年に日本に留学、1918 年にはアメリカに留学し、1923 年に帰国、北京大学教授となるが、1928 年に張作霖政府によって処刑された。

⁷⁴ もっとも、詳細については、たとえば陸上競技は、同じく商務印書館から刊行されていたマクロイ『田徑賽運動』を参照させている(『運動技術概要』203 頁)。

⁷⁵ John Mo (馬約翰), "My Fourteen Years Experience of Western Physical Education," *report submitted to the International YMCA College*, 1920, Answer 16.

表2 中国語版規則集一覧（-1920年代）

書名	編著者	出版社	出版年月	頁数	備考
隊球遊戲規則	基督教青年会総委辦	華美書局	1913.1	24 頁	バレーボール
運動規則綱要			1914.4		陸上競技
籃球規則	郭毓彬、高宝寿訳	基督教青年会全国協会書報部	1914.9?	49 頁	書誌は第2版1916.6による
網球規則	郭毓彬、高宝寿訳	基督教青年会全国協会書報部	1914.9?	44 頁	書誌は第2版1916による
足球規則	維乃爾著、朱樹蒸訳	中華書局	1914?		『中華教育界』所載の広告による
壘球規則	中華基督教青年会組合編輯部訳	中華基督教青年会組合編輯部	1915.1	44 頁	野球
足球規則	郭毓彬、高宝寿訳	基督教青年会全国協会書報部	1916.1	26 頁	書誌は1916.1版による
運動技術概要	遠東運動会中国委員会編	商務印書館	1917.9	222 頁	
三十種球戲規則	中国体育社編訳	三民公司	1922.3	168 頁	
足球規則	遠東運動会、中華基督教青年会編	青年協会書報部	1922	30 頁	
壘球規則	中華業余運動聯合会、遠東運動会、中華基督教青年会	青年協会書局	1923.1	51 頁	重訂
籠球規則	中華基督教青年会全国協会、青年協会書報部	中華基督教青年会全国協会、青年協会書報部	1923.3	26 頁	ケージボール
乒乓球規則	林沢蒼	上海乒乓球聯合会	1924.8	32 頁	卓球
手球規則	中華基督教青年会、遠東運動会	青年協会書局	1926.1	15 頁	ハンドボール
排球規則	遠東運動会、中華全国体育協進会	遠東運動会、中華全国体育協進会	1927.8	19 頁	バレーボール
隊球遊戲規則	中華基督教青年会、遠東運動会訂定	青年協会書局	1927	28 頁	バレーボール
棒球規則	遠東運動会、中華基督教青年会訂定	青年協会書局	1928	61 頁	野球
籃球規則	中華基督教青年会	青年協会書局	1929.1	117 頁	
田徑賽規則	中華基督教青年会、遠東運動会訂定	青年協会書局	1929.3	101 頁	陸上競技
橄欖球規則		青年協会書局	1929 ?		英語版

表3 マクロイ初期著作一覧 (1910年代)

英語書名	刊行地、出版社	刊行年	備考	編著者名	中国語書名	出版社	刊行年月
<i>Calisthenics</i>	Shanghai: Association Press	1915	J.H.Crockerとの共著	柯洛克、麥克樂著、胡貽穀訳	柔軟体操	基督教青年会組合	
<i>Gymnastic Nomenclature</i>	Shanghai: Association Press	1915		北美体育干事会著、麥克樂訳述	体操积名	基督教青年会全国協会書報部	1916.3
<i>Philosophy of Physical Education</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1915					
<i>Physiology of Exercise</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1915					
<i>Play and Games</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1915	翻訳				
<i>Principles of Systematic Physical Education</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1915					
<i>Track and Field Athletics</i>	Shanghai: Commercial Press	1915		麥克樂、李德晋訳	田径赛運動	商務印書館	1917.1
<i>Mass Athletics and Play</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1916		麥克樂著、教育会体育研究会訳	普及游戲運動	江蘇省教育会体育研究会	1918.8
<i>Objectives of School Physical Education</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1916					
<i>Practical Program of School Physical Education</i>	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1916					
				麦東意編訳	分級器械運動	基督教青年会全国協会書報部	1916
<i>Manual of Marching</i>	Shanghai: Commercial Press	1917		麥克樂著、上海中華基督教青年会訳	体操歩法撮要	商務印書館	1917.11

<i>Outline of Kinesiology</i>	Shanghai: YMCA Chinese National Committee	1917					
<i>Syllabus of Anthropometry</i>	Shanghai: YMCA Chinese National Committee	1917					
				国民体育社編、麥克樂訂正	網球	商務印書館	1917.3
				国民体育社編、麥克樂校正	棍棒	商務印書館	1917.8
Soccer Football	Shanghai: Commercial Press	1918		国民体育社編、麥克樂訂正	足球	商務印書館	1916.12
				国民体育社編、麥克樂訂正	籃球	商務印書館	1918.4
Calisthenics, A Manual for Teachers	Shanghai: Association Press	1919					
Muscular Action, A Syllabus for Kinesiology	Shanghai: Association Press	1919	H.T.Dziao との共著	麥克樂、焦湘宗編	体育上肌肉動作応用表	青年協會幹事養成部	1920.10
Philosophy of Play	Nanking: Kiangsu Provincial Educational Association	1919					

た中国語刊行物の一覧である。表の左半分はマクロイが作成した著作目録⁷⁶、右半分は著作目録のうち判明するものすべてと著作目録にないものについての中国語の書誌である。マクロイの著作は体操・学校体育、スポーツ、生理学の分野にわたる。体操・学校体育方面の著作には、『柔軟体操』、『分級器械運動』、『体操積名』、『体操歩法撮要』などがある。このうち『体操積名』は北米 YMCA 体育協会編 *Gymnastic Nomenclature of the Young Men's Christian Associations of North America* を翻訳したものだが、中国の現状にあわせて多くの修正が施されている。ドイツ語起源の術語の翻訳は困難を極め、多くの中国人の協力を得ながら、1 年かけて完成させた。内容は体操用語の解

⁷⁶ James R. Little, "Charles Harold McCloy: His Contributions to Physical Education," *dissertation*, University of Iowa, 1968, appendix. 本博士論文はマクロイに関する最も詳細な研究だが、中国語資料は一切使われていない。

説で、アメリカ式体操を導入するための基礎を提供し、学校体育における日本式体操の独占を突き崩そうとしたものだった⁷⁷。

スポーツ方面では、『足球』、『田径赛运动』、『网球』、『篮球』のような解説書がある⁷⁸。『足球』はイギリスの体育叢書からの翻訳で、中国人体育関係者が中国の状況に照らして取捨したものマクロイが訂正した。『足球』は1930年5月に第6版、『网球』は1927年7月に第7版、『篮球』は1931年7月に第7版が出されている。生理学方面では、運動生理学のシラバス『体育上肌肉動作応用表』がある。表のうち、体育研究会から刊行された書籍は中国語書誌が記されていないものが多い。これらの多くは体育伝習所での講義用に作成されたものと思われる。マクロイは、適切な英語文献がない場合、みづから英語のシラバスを作成して、それを中国人たちと実践し、修正しながら本の形にまとめて、翻訳刊行した⁷⁹。

マクロイにとって、1916年から1919年までは体育関係の出版物が最も多く刊行された時期であり、そして体育が最も進歩した時期であった⁸⁰。この時期、YMCA関係者は、政府や教育界との関係強化、体育指導者育成、体育書籍の翻訳を通して、体育界の主導権を握ろうとした。その過程で、とくにスポーツ界において、日本語経由のスポーツ用語が淘汰されていった（具体的状況は附論を参照）。

外国語と主権

日本式体操と英米式スポーツの対抗というYMCA体育主事たちの観点は、いうまで

⁷⁷ おりしも江蘇省教育会は医学名詞審査会（のち科学名詞審査会）に参加していた。マクロイのこの事業も、科学界の用語統一事業と無関係ではなからう。

⁷⁸ たとえば『网球』を書くにあたって、マクロイは Raymond D. Little, *Tennis Tactics*, Outing Publishing Company, 1913, James Burns, *How to Play Tennis*, Outing Publishing Company, 1915 などの書籍を読んでいる (Charles H. McCloy, “Annual Report of C. H. McCloy (1914-1915),” (『中国年度報告』12巻、301頁))。なお、『网球』は「Edited by PROFESSOR McCALL」とするが、「McCloy」の間違いである。

⁷⁹ Charles H. McCloy, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1914,” (『中国年度報告』7巻、97-98頁)、“Report of the Year Ending September 30, 1915,” (『中国年度報告』8巻、94頁)、“Annual Report for the Year Ending September 30, 1916,” (『中国年度報告』9巻、242-243頁)、“Annual Report for the Year Ending September 30, 1917,” (『中国年度報告』11巻、65頁)。

⁸⁰ 麦克楽「民国十一年之体育」『新体育』6巻2期、1923年2月。なおマクロイは1919年から1920年にかけて一時帰国していた。

もなく一面的であった。彼らは中国への影響力の行使という点で日本と対立したが、両者の態度は帝国主義的という点で一致していた。それはたとえば、伝統的な武術に対する YMCA 体育主事たちの否定的な視線によく示されている⁸¹。比較的中国人の立場で物事を考えたと思われるマクロイでさえ、例外ではなかった。「教育の理想は急速に変化しており、あらゆる政府の教育政策はいまやアメリカ合衆国がフィリピン諸島で用いたのと同じ形で展開している」というマクロイの言葉は、中国がアメリカの植民地であるフィリピンと同様に「文明化の使命」の対象であったことを物語っている⁸²。

スポーツ界における外国人や外国語の存在は、中国人にとって主権の問題でもあった。1905 年、袁世凱は北洋大学堂、北洋医学堂、軍医学堂で体操の号令を中国語に改めるよう命じたが、それは「各国で体操がみなその国の号令を用いているのは、愛国心を起こさせるためであり、関係するところは小さくない。中国で「外洋」の号令を慣用しているのは、とりわけ道理にあわない」からであった⁸³。これらの学校で体操を教えていたのは西洋人だったと思われる。西洋語による教授は、主権の問題のほかに、効率の面でも問題があった。1907 年に総理天津女学事務の傅增湘は、天津の女学で立て直しが必要なものとして体操と制服を挙げた。このうち体操について、女子師範と女子高等学堂では西洋人が教えているが、言語に隔たりがあり、指導に難が多く、その進歩は日本人教師が教えている公立女学に及ばない、と指摘している⁸⁴。

⁸¹ たとえば、Alfred H. Swan, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1915,” (『中国年度報告』8 卷、335-336 頁)。スワンは拳術導入を試みるが、結果的に YMCA の体育事業にそぐわないと判断した。現地の身体文化に対するこのような考え方は、中国に限られず、YMCA の体育事業のなかでしばしば見られた。ただし、マクロイは科学的であれば武術も排除しなかった。

⁸² Charles H. McCloy, “Annual Letter (1919),” (『中国年度報告』15 卷、99 頁)。YMCA の体育事業の帝国主義的性格については、拙稿「極東選手権競技大会と YMCA」夫馬進編『中国東アジア外交交流史』京都大学学術出版会、2007 年、Stefan Hübner, “Muscular Christianity and the ‘Western Civilizing Mission’: Elwood S. Brown, the YMCA, and the Idea of the Far Eastern Championship Games,” *Diplomatic History*, vol. 39, issue 3, June 2015 などを参照。

⁸³ 「飭天津大学堂北洋医学堂軍医学堂体操改用華字口令札」駱宝善、劉路生主編『袁世凱全集』13 卷、河南大学出版社、2013 年、425 頁。

⁸⁴ 『北洋公牘類纂』卷 11 「総理天津女学事務傅編修增湘稟辦女学情形暨条陳整頓事宜文並批」。曾広鏞（曾國藩の甥の娘）が運営する淑慎女校でも、体操に英語の号令を用い、「他日戦時の予備」

最初の極東大会が終わってまもない 1913 年 5 月、東呉大学の趙紫宸は「学校運動改良の急務」と題する文章を YMCA の雑誌『進歩』に発表し、スポーツの発展のためには全国学界運動会が必要であると訴えた⁸⁵。この「運動会」とは、日本でいう体育協会のようなスポーツの統轄機関のことである。趙は「運動会」が行なうべき事業として、(1) 名詞の審査・決定、(2) ルールの制定、(3) 道德の維持、(4) 精神の奮起、を挙げた。(1) に関しては次のようにいう。

いまわが国の各学校は遊戲のことになる、いつも西洋語を用いる。たとえばサッカーでラインを越えると、プレイヤーは必ず「outside」といい、「出界」とはいわない。これは些細なことではあるが、非常に重要なことである。もし遊戲で西洋語の使用を重視するならば、中国人はさながら自分の言葉を持たない山猿のようなものである。

趙がわざわざこの「些細なこと」をゆるがせにしているのではないと主張するのは、決して利便性のためだけではなかった。「山猿」という言葉に端的に示されるように、自分の言葉を持たないスポーツは猿芝居にすぎなかった。この点は「(2) ルールの制定」でいっそう顕著にあらわれている。

いま各学校・団体が使用しているルールはすべて西洋のものである。競技のたびに、参加する各団体はかならず互いに協議して、西洋のどの団体のルールを用いるかをあらかじめ相談しておかねばならず、手続きは非常にめんどろを起しやうい。ミッションスクールにいたっては、おおむねみな西洋人の教授がおり、彼らが熟知するものを採用して、他の団体と競技する。もし他の団体の教授や選手がこのルールに詳しくなければ、容易に弊害を生じ、また双方に悪感情をもたらししてしまう。

趙にとって、自らの言葉とルールを獲得することこそ、スポーツを発展させるための最も基本的な条件であった。しかし実際には、規則集は英語のものばかりで、それを使えたのは西洋人と一部の中国人に限られていた。ルールは主として口頭で伝えられ

としていた（「特別調査 湖南女界」『女子世界』1905 年 1 期）。

⁸⁵ 〔趙〕紫宸「学校運動改良之急務」『進歩』19 冊、1913 年 5 月

たから、西洋人のいうなりであった⁸⁶。

「南洋」出身で、『英文週刊』の編集者であった張世鑒は、1915年11月に蘇州で開催された第2回江蘇省立学校連合運動会に審判として参加した。審判は中国人と西洋人があわせて約30名おり、西洋人の審判は蘇州の学校の教員か上海YMCAの体育主事であった。大会終了後の談話会で、張は次のように発言した。

西洋各国ではみな陸上競技に関する種々の規則があつて書籍として刊行されており、学生ならみな聞き知っている。わが国の運動はまだ幼稚な段階にあり、この種の規則も欠如している。そのため陸上競技を開催するたびに、必ず異国の人材を借りて審判を任せている。しかしながら、審判をする西洋人は、必ず自分たちのやり方に従うが、我々はそのやり方をはっきり理解できないばかりか、国情も違い言葉も同じではないために対立することも多い。

こう述べた張は、西洋のやり方を参考にして運動規則を定め各学校に頒布することを提案している⁸⁷。この提案に先んじて、「南洋」出身の英語教師朱樹蒸は、「サッカーのルールは複雑だが、中国では研究も少なく専門書もないので、外国人と試合をすると、往々にして見劣りするのを免れない」として、イギリスの規則集を翻訳し、中華書局から『足球規例』を刊行していた⁸⁸。

外国人との試合だけでなく、中国人同士の試合でも審判は西洋人であることが多かった。とりわけ、大規模な競技会は西洋人の手で運営されることが多く、全国運動会はもちろんのこと、華北運動会のような地域的な大会もそうであった。上海では、1914年に東呉大学のスマート（R. D. Smart 司馬徳）の提唱で華東大学体育連合会（East China Intercollegiate Athletic Association）が結成され、東呉大学のほか、上海のセント・ジョーンズ大学、「南洋」、滬江大学、南京の金陵大学、杭州の之江大学が参加していた。「南洋」以外はすべてミッションスクールで、歴代の書記はみな外国人であった。

⁸⁶ 上海体育志編纂委員会編『上海体育志』上海社会科学院出版社、1996年、483-484頁。

⁸⁷ 張世鑒「參觀江蘇省立各學校第二次連合運動會記」『教育雜誌』7巻12号、1915年12月15日。

⁸⁸ 「足球規例」（広告）『中華教育界』4巻5号、1915年5月25日。同書の現物は未見だが、『湖南教育雜誌』3年12期、1914年12月に掲載された英国維乃氏著、江蘇省立第二師範學校英文教員朱樹蒸訳「足球規例」がそれにあたろう。Philippine Amateur Athletic Federationが発行する*Official Rule and Handbook*に同内容の文章（英文）が掲載されている（確認したのは1918-1919年版）。

しかしこの時点で主権の問題が大きく取り上げられることはなかった。その理由として、反帝国主義のような概念がまだ広く共有されていなかったこと（それどころか『新青年』は全面西洋化を唱えていた）、中国人のスポーツ関係者がまだ少数で組織化もされていなかったことなどが挙げられよう。

アメリカ式体育の「勝利」と兵操の盛衰

第一次世界大戦でドイツが敗北し、軍国主義の権威が失墜するなかで、教育界を風靡したのがデモクラシーであった。1919年4月から2年間にわたり中国に滞在したデューイ（John Dewey）の影響も大きかった。1919年10月に開かれた全国教育連合会で議決された改進黨学校体育案は軍国主義からの転換を促した。マクロイもこのころからしばしばデモクラシーに言及するようになる。1920年の教育連合会での講演でマクロイは、スポーツは民主主義と関係があると語っている⁸⁹。1921年に発表した論文でマクロイは体育を受動的国民を養成するものと自発的国民を養成するものとに大別した。前者の代表が専制主義と結びついた兵操で、日本やドイツが典型とされる。後者の代表は「^{デモクラシー}民治主義」と結びついた自由な遊戯運動で、アメリカやイギリスが典型とされる。後者において、個々人はルールを遵守しつつ、一つの目標を目指して協力するが、個人の個性は否定されない。学校の代表を選ぶ場合、あらゆる成員に平等の機会が与えられ、財産や身分に関係なく、領袖としての資格と運動能力をもつものが選挙される。選ばれた人は、投票しなかった人を怨むことはない。それはちょうど二つの政党が選挙で競っても、投票の後に敵視しあってはならないのと同様である。個々人は選ばれた人に従い、また審判を尊重しなければならない。学校の代表を選ぶことで、学校に対する「忠心」が発達する、と。こうした体育の諸特性は、まさしくデモクラシーに通じるものであった⁹⁰。

1921年1月に中華書局から刊行された高等小学校用の国文読本には「致某校足球队書」という手紙の例文が収められている⁹¹。県立第一高等小学校では足球队が組織され

⁸⁹ 『申報』1920年10月27日。

⁹⁰ 麥克樂「体育与中国的「德謨克拉西」」『青年進歩』39期、1921年1月。

⁹¹ 『新教育教科書国文読本（高等小学校用）』1冊、中華書局、1921年。

て2か月たった。そこである学校に公共体育場でのサッカー試合を申し込むという内容である。この手紙は高等小学校でスポーツが盛んにおこなわれていることを前提にしている。もちろん、このレベルでは、正式のルールを採用したのではないだろうし、外国人の審判がいたとも思われないので、中国語でプレイしたのであろう。スポーツが普及しつつあったこの時期、主要メディアから受ける印象とは違い、英語でプレイする人の割合はじつはそれほど多くなかったと考えられる。

1922年11月1日公布の学校系統改革案で大枠が示された「壬戌学制」は、従来の日本式教育にかえてアメリカ式教育を採用した。「体操」は「体育」に改められ、兵操が廃止され、遊戯やスポーツが体育の中心となった。これは、日本式体操に対抗してアメリカ式体育を推進してきたYMCA体育主事をはじめとするスポーツ関係者の「勝利」であった。

中華教育改進社の第1回年会（1922年7月開催）は新学制に大きな影響を及ぼした会議である。この会議でマクロイは「体育及国民遊戯」の分科会を主宰した（マクロイはすでにYMCAを離脱し、東南大学体育系主任を務めていた）。この会議を契機として中華教育改進社附設全国体育研究会が設立され、会長に袁敦礼、総務に馬約翰、研究科に呉蘊瑞、編輯組にマクロイ、推广科に董守義が選ばれた。いずれも広い意味でYMCA系の人物であった。蔡政杰によれば、YMCAの体育事業は外国人が主導したため、中国の政治的局面的制約を受けることが少なく、かえって官僚、政治家、軍閥の支持を受けることができた⁹²。これは体育事業のみならず、YMCA全体についてもいえることである。いやむしろ、YMCAの体育事業の発展は、1920年代前半に黄金時代を迎えたYMCA自体の発展の一角であったといえる。

日本式体操（とくに兵操）からアメリカ式スポーツへという壬戌学制の図式的理解は、後者の優勢を主張する人びとによって、意図的につくられた面がある。なぜなら、ミッションスクールだけでなく、YMCAでも軍事訓練がおこなわれていたからである。たとえば、日清戦争が学生たちに軍事への熱狂を呼び起こした結果、天津YMCAではラ

⁹² 蔡政杰「基督教青年会之体育思想」許義雄ほか『中国近代体育思想』啓英文化事業有限公司、1996年。YMCA全体でみれば、外国人主事の割合は2割程度であったが、体育主事の場合、全国レベルの体育事業に携わるのは外国人主事が多かった。

イアン（David W. Lyon 来会理）が軍事訓練のクラスを組織したし、上海のセント・ジョーンズ書院（大学となるのは1905年）では教員のクーパー（Frederick C. Cooper 顧斐徳）が軍事訓練を実施することになった⁹³。1905年の天津普通中学堂の状況は次のようであった。

尚武精神が広まり、どの学校でも軍事訓練を必修として課している。我々も軍事訓練をおこなっている。我々の学校は学部より公式に認定されているので、制服、鼓笛隊、フラッグとバナーがあり、総督や他の高官による公開検閲では他の学校と同じ地位を占めている⁹⁴。

福州のプロテスタント教会が運営する学校では、幼稚園児までもが木銃を持って軍隊行進をしていた。1914-1915年度、漢口の基督教青年会中学（Y.M.C.A. Middle School）では週2回の軍事訓練が実施されていた。また1916年には、軍事教育はアメリカの学校を模範とするべきだとする文章がYMCAの雑誌に掲載された⁹⁵。

同年秋、北京の清華学校で兵操が導入された。清華学校はミッションスクールではなかったものの、アメリカ留学の予備校であったことから、学生の「洋気」はつとに内外に知られていた。兵操の導入は周貽春校長の意向を受けてのことであった。1918年にはウェストポイント帰りの王賡が指導し、主に中国陸軍部歩兵操典に準拠し、アメリカ陸軍法典も参照した⁹⁶。

19世紀末から第一次世界大戦の時期、アメリカではミリタリズムが昂揚しており、中国の学校でアメリカ式の軍事訓練がおこなわれても不思議ではなかった。アメリカ人YMCA主事のなかにも第一次世界大戦中に香港、上海、漢口などの義勇軍に参加して軍事訓練に励むものが少なからずいた⁹⁷。また、兵操が望ましくないと考えていても、

⁹³ Kimberly Ann Resedorph, "Reformers, Athletes and Students: The YMCA in China, 1895-1935," *dissertation*, Washington University, 1994, p. 205, Shirley S. Garrett, *Social Reformers in Urban China: The Chinese Y.M.C.A., 1895-1926*, Harvard University Press, 1970, p. 63, 拙稿「上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史」。

⁹⁴ Robert R. Gailey, "Report of Robert R. Gailey (1904-1905)," (『中国年度報告』2巻、358頁)。

⁹⁵ Ryan Dunch, *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China, 1857-1927*, Yale University Press, 2001, pp. 136-139. 蔣鈺「学校中之軍事教育談」『進歩』9巻4号、1916年2月。

⁹⁶ 莊「兵操真義」『清華週刊』87期、1916年11月15日、「雜項（二）兵操」『清華週刊』本校十周年紀念号、1921年4月28日。

⁹⁷ たとえば香港のマクフィアーソン（John L. McPherson, "Annual Report Letter of J. L.

兵操を教えざるをえない主事もいた⁹⁸。さらに言えば、YMCA の体育事業でスポーツが重視されるようになったのは1890年代になってからである⁹⁹。体育と軍事を峻別するマクロイのような考えが、当時のYMCA 体育主事の間でどこまで共有されていたかは疑問である。マクロイ自身も、少なくとも表面上は軍国主義を受け入れていた。マクロイが明確に兵操を批判するのは1919年になってからである¹⁰⁰。軍国主義の凋落、デモクラシーの昂揚という第一次世界大戦後の時代思潮のもとで、「ほぼ完全に専制式の教材で、デモクラシーの精神に違背する」というような兵操観が表面に出てきたのである¹⁰¹。

第三章 ナショナリズムとスポーツ

スポーツの中国人化

1923年の第6回極東大会を前に、YMCA は激しい逆風にさらされていた。前年に始まった反キリスト教運動である。さらに、1923年3月末から4月にかけて旅順・大連回収運動が起こると、日本で開かれる極東大会をボイコットせよとの声が高まった。中国側の準備をとりしきっていたYMCA 体育主事のグレイ (John H. Gray 葛雷) はとくに声明を発表して参加の意義を説明しなければならなかった¹⁰²。

5月3日から2日間の日程で極東大会華北予選を兼ねた第10回華北運動会が南開大学で開催された。この大会はこれまで外国人が運営していたものを、中国人自身が運営したという点で画期的なものであった。この決定は大会準備の責任者で南開大学校長であった張伯苓の強い意向を受けてなされ、「洋話」を口にすることも許されなかつ

McPherson (1917-1918),” (『中国年度報告』12巻、127頁)), 上海のフィッチ (George A. Fitch, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1918,” (『中国年度報告』12巻、362頁)), 漢口のワグナー (Harry M. Wagner, “Annual Report of H. M. Wagner (1917-1918),” (『中国年度報告』12巻、480頁)) など。

⁹⁸ Harry M. Wagner, “Annual Letter (1919),” (『中国年度報告』15巻、344、347頁)。

⁹⁹ Elmer L. Johnson, *The History of YMCA Physical Education*, Association Press, 1979, pp. 77-78.

¹⁰⁰ Charles H. McCloy, “Annual Letter (1919),” (『中国年度報告』15巻、107頁)、麥克樂「中学校体育應廢除軍事訓練之主張」『青年進歩』22期、1919年4月。

¹⁰¹ 麥克樂「体育与德謨克拉西」『体育与衛生』3巻1期、1924年3月。

¹⁰² 『申報』1923年4月12日。

た¹⁰³。さらに1925年の第12回華北運動会から国産の体育用品を使用することになったが、これも張の意向を受けたものであろう。というのも、張は中国最初の体育用品工場といわれる利生製球廠や春合製球廠の設立に深く関与していたからである¹⁰⁴。

第6回極東大会で中国は惨敗を喫した。中国人スポーツ関係者は、体育を提唱・主宰する機関がないことが主たる敗因であると考えた¹⁰⁵。じつはそのような機関はすでに存在していた。1922年4月に成立した中華业余運動連合会（China Amateur Athletic Association）である。会長は張伯苓、副会長は郭秉文、秘書はマクロイ、会計は阮志珍で、幹事として劉福基、クラック（Robert W. Clack 柯藍客）、スマート、馬約翰、郝伯陽が名を連ねていた。彼らの多くはYMCA関係者であった。つまり、中国人スポーツ関係者が言わんとするところは、中国人主体の機関がないということであった。そこで中華体育協会の設立にむけて準備が始まった¹⁰⁶。

翌1924年は武漢で第3回全国運動会が開催されることになっており、中華体育協会はこれを機に成立大会を開く予定にしていた¹⁰⁷。全国運動会の準備はグレイを中心に進められていたが、3月下旬になって全国運動会反対の運動が起こった。中国人のことは中国人がすべきで、中華体育協会が中心となって大会をボイコットせよというのが彼らの主張であり、とくにグレイの専断に対する反発が強かった¹⁰⁸。結局、グレイは表

¹⁰³『大公報』1934年10月10日、鄭致光主編『張伯苓伝』天津人民出版社、1989年、61頁。

¹⁰⁴利生製球廠は1921年に孫潤生が設立し、春合製球廠は1922年（設立年は諸説あり）に傅泊川が設立した。孫は南開大学教員で、傅は天津YMCAに関係があった。詳細は、湯銳「“体育救国”的一个側面：近代華北地区体育用品業初探：以天津春合体育用品廠為個案」『歴史教学』2013年14期、周利成「張伯苓推動中国体育器材国産化」孫海麟主編『中国奧運先驅 張伯苓』人民出版社、2007年、201-207頁を参照。1930年に極東大会が東京で開かれたとき、広瀬謙三は張伯苓に日本の議会は国産の材料でつくられていると説明したところ張が共感したというエピソードを紹介し、「従来中華民國のスポーツは欧米人の世話になりがちで未だ一人歩きできぬのを残念に思っていた張氏の胸にこの国産という言葉が共鳴したのだろう」と振り返っている（広瀬謙三「体協から体育会へ（三）」『体育日本』21巻1号、1943年1月）。この文章は1943年に書かれており、大東亜共栄圏における日本と中国の関係を念頭に置いたものであるが、張の国産へのこだわりを示すエピソードとして興味深い。

¹⁰⁵張天白「中華全国体育協進会籌備成立始末」『体育文化導刊』1990年6月。

¹⁰⁶1923年10月7日に中華体育協会の成立大会が開催される予定であったが、十分な人数が集まらなかったため、籌備会という形で開催された（『申報』1923年10月8日）。

¹⁰⁷『申報』1924年2月25日。

¹⁰⁸『申報』1924年4月20日。張伯苓は、グレイは競技委員の1人にすぎず、彼が大会を召集する

面から退き、マクロイら外国人も主要なポストから外れ、中国人が主体となって運営がおこなわれた。ただし、この大会が西洋的な雰囲気にも包まれていたことは後述する通りである。大会終了後、中華全国体育協進会が結成された。役員はみな中国人であった。中国人と良好な関係を持つマクロイは顧問に選ばれたが、グレイの名前はなかった¹⁰⁹。

1925年4月には各地の運動会でミッションスクール排斥の運動が起きた。四川の各校連合運動会で各校はミッションスクールの参加を一律に拒否したため、華西協合大学の学生は出場断念を余儀なくされた¹¹⁰。湖南全省運動会でも、学生たちはミッションスクールの加入に反対した。湖北全省運動会では、キリスト教反対のビラが場内にまかれ、数十分にわたって会場が混乱し、ミッションスクールの教職員と大会役員の宋如海（武昌 YMCA）が退出することによってようやく騒ぎが収まった¹¹¹。セント・ジョンズ大学で「国旗事件」がおこり、非ミッション系の大学が華東大学体育連合会から脱退し、江南大学体育協会を結成したのもまさにこの時期であった¹¹²。くわえて、マクロイ（1926年）、グレイ（1927年）が相次いで帰国し、体育・スポーツ界における外国人の影響力はほぼ消滅した。

こうして、1923年からわずか3、4年の間にスポーツの中国人化が完了した。ただし、中国のスポーツ界が置かれた半植民地的状況はなお完全には解消されなかった。過去2回の極東大会が開催された虹口公園は、中国の主権が及ばない土地であり、ふだんは中国人の立ち入りが禁止されていた¹¹³。大会期間中は特別に入場を許されたが、中国人は入場料を支払わねばならなかった（外国人は無料）。しかし、反帝国主義を掲げて国民革命を推進した南京政府のもとで開催される第8回極東大会でこのようなことが

というのは華東の一部の人間の誤解であり、問題は西洋人が実権を握ることではなく、中国人に責任感がないことであると述べている（「体育運動会的縁起和発展」『南開週刊』1924年5月15日（王文俊ほか編『張伯苓教育言論選集』南開大学出版社、1984年所収））。

¹⁰⁹ 名誉会長は王正廷、董事長は張伯苓、名誉主任幹事は沈嗣良、名誉幹事は郝伯陽、宋如海、幹事は蔣湘青で、マクロイは顧問に就任した。グレイは中華体育協会では顧問に就任する予定だった（『申報』1924年5月20日）。

¹¹⁰ 『申報』1925年4月27、30日。

¹¹¹ 『申報』1925年4月13日。

¹¹² 拙稿「上海セント・ジョンズ大学スポーツ小史」。

¹¹³ 虹口公園が中国人に開放されるのは1928年7月のことである。

許されるはずもない。中華全国体育協進会はロックフェラー財団との交渉で、財団所有の土地に立つ中華体育場の使用を認めてもらったが¹¹⁴、プールは確保できず、虹口公園のプールを借り受けるほかなかった。このため、中国の選手は事前練習ができなかった¹¹⁵。このことに関して、結成もない天津体育協進会の副会長杜庭修は次のように記す。

このたびの開会式の声のなかで、注意すべきものが4つある。1つ目は、租界の地を会場としたのは国の大いなる恥辱である。……3つ目は、中国で開会し、聴衆も大多数が中国人であるにもかかわらず、司会者や演説者は中国語と英語の両方を用いた。これに比べ、フィリピンと日本の代表はそれぞれ自国の言葉を用いていた。〔2か国語を用いるのは〕時間がかかるだけでなく、わが国の国語の尊厳を失するもので、識者は蛇足だと譏っている¹¹⁶。

ナショナリズムの高まりはスポーツの中国人化を促進したが、当然にスポーツの中国語化にも影響を及ぼした。1920年代のスポーツと言語の問題については節を改めて検討しよう。

体育名詞の審定

1920年代になっても、スポーツの現場では英語が広範に用いられていた。1924年に開催された第3回全国運動会を観戦した清華大学の郝更生は、「Come on, boy, you can beat him!」「Hurray! North China comes in one, two, three」「Take it away from him!」「Too bad you missed that one」のような英語の声援が珍しくなく、目を閉じればあたかもアメリカで観客席に座っているかのようにだったと述べている。郝はクリーンで友好的に、それでいて奮闘的に激しく競い合う青年たちに中国統一への希望を見出した¹¹⁷。そもそも郝がこの書『中国体育概論』を英語で記していることに（英語のタイトルは *Physical Education in China*）、英語使用の広がりを見て取ることができよう。その原因の一つは、外国人審判の存在である。1924年に華東大学体育連合会のバスケッ

¹¹⁴『申報』1927年1月16日、5月21日。結局、中華運動場は1933年まで存続した。

¹¹⁵『申報』1927年8月11日。

¹¹⁶杜庭修「遠東運動会剖記」『体育』1巻3号、1927年10月15日。

¹¹⁷Gunsun Hoh, *Physical Education in China*, Commercial Press, 1926, pp. 157-158.

トボールのリーグ戦で審判にあたったのは、8人の外国人と2人の中国人であった¹¹⁸。

1925年の五三〇事件の直後、セント・ジョンズ大学のポット校長が愛国運動に参加した学生を処罰したことをきっかけに、学生約500人が同校を離れ、あらたに光華大学を設立した。「南洋」は華東大学体育連合会にセント・ジョンズ大学の資格取消を要求したが、否決された。「南洋」の愛国的主張の是非を検討する会議が英語でおこなわれたことは、中国の半植民地的状況を反映していた¹¹⁹。1925年12月12日におこなわれた清華大学と北京交通大学のバスケットボールの試合で、終了時間をめぐる解釈の違いから、清華大学是北京各校運動比賽連合会に対して脱退を申し出たが、その書簡は英語で書かれていた¹²⁰。

モリスはスポーツ界で英語が使用された理由として、階級の区別とミメーシス（模倣）を挙げている。つまり、英語を使うことで、自分たちが一般大衆とは異なる階級に属することを示すと同時に、精神も肉体も西洋近代という超越的世界にいるかのごとく感じる事ができたというのである¹²¹。これは有山のいう「人工的な遊戯世界」に通じるであろう。

もっとも、スポーツ界の英語を取り巻く状況には大きな変化が生じていた。1910年代後半以降のスポーツの飛躍的發展にともない、多くの非ミッション系の学校がスポーツに参加するようになった。彼らはミッションスクールの学生ほど英語に接する環境に恵まれていなかった。そのため、多くの場合、英語の使用は、日本の学生と同じように、単語レベルにとどまったと推察される。さらなるスポーツの発展には、単語レベルまで中国語化する必要があると考えられた。

1922年の中華教育改進社年次総会の分科会「体育及国民遊戯組」で、「委員会を組織して体育の一切の名詞を審定する」との議案が提出された¹²²。このプロジェクトは、この総会を契機に設立された中華全国体育研究会が受け持つこととなった。同会は翌

¹¹⁸『申報』1924年2月25日。ちなみに、2人の中国人とは上海YMCAの郝伯陽と東呉大学体育専修科の学生馮家声である。

¹¹⁹拙稿「上海セント・ジョンズ大学スポーツ小史」。

¹²⁰「清華籃球隊致北京各校運動比賽連合会函」『清華週刊』24巻18号、1926年1月8日。

¹²¹ Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation*, pp. 53-55.

¹²² 袁敦礼「中華教育改進社第一次年会体育及国民遊戯組所作的事和個人的感想」『体育季刊』1巻3期、1922年11月。

年4月の『体育季刊』で、プロジェクトの進捗状況を次のように報告している。

体育上の一切の専門の積名〔訳語とその解説〕を協議・決定すること。現在本会の研究部はすでに積名の編纂・校訂を始めており、柔軟体操、球竿、棍棒、器械体操、翻觔斗、一切の球技運動、および水泳等の積名が含まれている。冬休み後に各種の積名を謄写版で印刷し、各区の部門別研究会に送付して審査してもらい、今年の年会で大多数の名詞を決定したい¹²³。

その成果の一端が、『体育季刊』2巻4期から3巻2期に連載された呉蘊瑞「体操積名」で、1916年刊行の『体操積名』の増補改訂版である（呉はマクロイの学生）。しかし、1923年12月にマクロイが提出した初年度の成績報告には、名詞審定に関する言及は見えず、作業は中断したようである¹²⁴。

1924年5月、セント・ジョンス大学出身で『申報』の編集者だった馬崇淦は「運動會与中国語言文字」なる文章を発表した。

一国の国民はその国自身の言葉と文字を用いるべきである。これは一定不変の道理であり、これによって一国の尊厳を守ることができる。……運動会について論じれば、明らかに本国人自身の競技であり、国際的な競技でない場合でも、各種スポーツの名称、選手が身につけるチームの表記、役員の号令、競技結果の報告、観客の歓声はみな外国の言葉と文字を使うことがある。これは華東地区で多く見られるようである。このようなやり方には2つの欠点がある。第一に、自国語を軽視し、外国化してしまうことである。第二に、体育の普及を妨げることである。なぜなら一般の人びとがみな外国語を理解しているわけではないからだ。その原因は、第一に、一般に運営する人びとが外国人か外国化した留学生だからである。……第二に、スポーツの名称に正式の中国語名がまだないからである。目下、各競技はすべて外国から伝わったものだが、中国語の名称はしばしば統一されていない。ある人は「隊球」を「排球」と言い、「棒球」を「棍球」と言う。中国語の名称が統一されていないので、容易に理解できない。そのため、Valley Ball [sic] とか Base Ball のような英語の名称がかえって都合がよいのだ。……みなが外国の

¹²³ 記者「編輯小言」『体育季刊』2巻1期、1923年4月。

¹²⁴ 麥克樂「全国体育研究会第一年的成績報告」『体育季刊』2巻4期、1923年12月。

言葉と文字を採用するので、スポーツはなかなか普及しない¹²⁵。

この文章が発表されたのは第3回全国運動会の直前だった。この大会が中国人主体で運営された初めての全国運動会だったことを考慮すれば、馬の主張の背後にある強烈な主権意識を容易に読み取ることができよう。すでに第一の原因が取り除かれた以上、第二の原因、すなわち、中国語名称の不統一を解消することが残された課題であった。

1925年の中華教育改進社年次総会で、郝更生から「統一体育名詞及口令案」が提出された。郝によれば、現在中国の体育界で使用されている号令には、日本体育からの翻訳、欧米体育からの翻訳、軍操式の3つがあり、これを統一しない限り、将来に進歩はなく改良の機会もないのである。協議の結果、体育名詞口令審査委員会（マクロイ、章輯五、郝更生、陳奎生、董守義）を組織し、中華体育協進会や各体育学校と共同で進めることが決まった¹²⁶。郝はこの年の秋に清華学校に赴任すると、さっそく体操に関する号令を中国語にする作業に取りかかった。しかし、訳語は直訳が多かったため、学生たちは突飛に感じ、怪しんで失笑しないものはなかったという¹²⁷。

清華学校では1920年に兵操が必修から外されたものの、1923年に再度必修化されていた。兵操の再導入は留美学生会が提案し、校長がこれを支持、学生たちも愛国心に駆られて賛成した結果、実現したものである。すべてにアメリカ式の同校では、兵操の号令も英語だった。趙国鏞は英語の号令ではいざ戦争となっても軍隊を指揮できないし、また中国語の号令がすでにあり、英語の練習にもならないので廃止すべきだと主張した。兵操自体に反対だったH.C.H.は、西洋式の体操服を着て、西洋語の号令を用いて、なお愛国と言えるだろうかと問いかけた¹²⁸。

英語の号令に対する批判は他の分野でも起こっていた。上海で最初のボーイスカウトは1913年に華童公学校長のケンプ（G. S. Foster Kemp 康普）が設立したもので、その後ミッションスクールに、ついで公立学校に広がった。1917年の中華童子軍大演習

¹²⁵ 馬崇淦「運動会与中国語言文字」『教育与人生』31期、1924年5月19日。

¹²⁶ 「分組會議議案彙録 体育与衛生組」『新教育』11巻2期、1925年11月12日。

¹²⁷ 「体育部」『清華週刊』24巻4号、1925年10月2日。

¹²⁸ 「雜項（二）兵操」『清華週刊』本校十周年紀念号、1921年4月28日、史綱「兵操問題」『清華週刊』266期、1923年1月6日、趙国鏞「兵操時応否用英語口令」『清華週刊』288期、1923年10月5日、莫一「清華「洋操」」『清華週刊』288期、1923年10月5日、H.C.H.「對於兵操應注意的幾点」『清華週刊』322期、1924年10月17日。

を見学した杜元なる人物は、「号令に国語を用いず、英語を用いているのは、軍国民教育に合わない」と批判した。また陶行知は華童公学の童子軍について、「すべて号令には英語を用い、英米人の教練はすこぶる熱心だが、中国人は受け身の地位に置かれ、参議の権もない」と主権の問題とからめて論じた。1923 年になって、上海童子軍連合会はこうした批判を回避すべく号令の中国語化を実施することにした。もっとも、すぐにすべての号令を中国語に改めることはできないが、それでも以後は中国語の号令に心がけることが決まった。上海の万国商団（国際義勇軍）の中華隊は 1907 年に設立されて以来、英語の号令を用いてきたが、1928 年に中国語の号令を採用した¹²⁹。

スポーツの中国化

1910 年代以来、YMCA の体育関係者により着手されたスポーツの翻訳は、明確な翻訳対象、すなわち正確に翻訳されるべきスポーツの存在を前提にしていた。言うなればそれは中国の身体文化を西洋のスポーツに近づけるための基礎作業であった。YMCA の体育関係者は西洋のスポーツの中国への適用性を疑わなかったが、ナショナリズムの高まりの前にそのような前提は崩れ去り、西洋のスポーツをいかにして中国のスポーツに、あるいは中国の体育に組み込むか、すなわちスポーツの中国化が課題となるにいたる。

YMCA の体育関係者は壬戌学制で兵操廃止に成功したが、その「勝利」はつかの間のものでしかなかった。先に触れたように、清華学校では早くも 1923 年に兵操が必修化されたし、他の学校でも学生軍が次々と組織された。教育のデモクラシー化を推進してきた中華教育改進社はふたたび軍国民主義に傾斜していった。そして、1928 年、南京政府のもとで、高級中学以上の学校に軍事訓練が正式に導入された¹³⁰。兵操・軍事訓練は、それとの距離によって中国の体育のあり方が測定できるという点で、リトマス紙のような存在だった。満洲事変の勃発は体育の軍事化をいっそう加速させた。

ところで、1927 年 2 月に商務印書館から刊行された初級小学用の常識教科書のうち、社会服務をテーマとする第 6 冊は「足球队」という話から始まる。

¹²⁹『申報』1917 年 11 月 18 日、1920 年 8 月 5 日、1923 年 5 月 18 日、1928 年 10 月 7 日。

¹³⁰拙稿「軍隊と社会のはざまで」。

同級生が足球队を組織する。隊長を推薦して選び、みな彼の指揮に服従する。さらにいくつかの規則を制定する。みなが遵守し違反しないように取り決める¹³¹。

次の「比賽足球」という話は、双方が選出した審判の判定に服従することの重要性を説き、「規則」「運動」「脳と身体」「学生界」「選挙方法」「主席」「会議規則」が続く。この構成はマクロイが主張していたようなスポーツとデモクラシーの関係を彷彿とさせるが、常識教科書とマクロイの間には微妙な差異がある。マクロイは規則を守ると同時に、個性を発揮することを重視し、また各自がリーダーに対して勧告や中止を求める権利を認めていたが、常識教科書で重視されるのはもっぱら規則や指揮への服従である。常識教科書は国民党の「党義」を提唱することを第一の目的に編まれたものであるから、その意図するところは、国民の代表である国民党への服従であった。スポーツの読み替え（中国化）はデモクラシーからナショナリズムへの変化を反映したものであったのである。

1932年8月7日、ロサンゼルス・オリンピックにただ1人参加した劉長春が予選を敗退したとの知らせを受けて、天津『大公報』が社論で「土体育」を提唱、いわゆる土洋体育論争の口火を切った¹³²。おしりも8月16日から全国体育會議が開かれることになっており、世論を味方につけて會議の主導権を握ろうと、「土体育」と「洋体育」のそれぞれの支持者が論戦を展開した。『大公報』が提唱する「土体育」とは、養生の道、武術、兵操・軍事訓練であり、中国の伝統的体育の範囲に収まるものではなく、むしろ「洋体育」の対抗物ととらえるべきものである。「土体育」の出現は、「洋体育」が中国社会で無視できない存在になっていたことを暗に示している。全国体育會議では国術と体育を合して「新体育」を築き上げるという目標が設定されたが、それはスポーツがもはやそのままでは受け入れられないことを意味していた¹³³。これを機にスポーツは軍事的効用や国家への貢献度が強く意識されるようになり、YMCA 体育関係者たちが強調した人格形成やデモクラシーのような要素は後景に退いていった¹³⁴。

第1回極東大会に参加した選手と比較すると、コーチ兼通訳に付き従う劉長春の姿

¹³¹ 王強編『新時代常識教科書（初級小学用）』6冊、商務印書館、1927年。

¹³² 「今後之国民体育問題」天津『大公報』1932年8月7日。

¹³³ 許光廬「洋土体育思想之論争（1915～1937）」許義雄編『中国近代体育思想』。

¹³⁴ この論争はアメリカ留学組とドイツ留学組との対立という側面も持っていた。

は、ある意味でスポーツの中国化した姿を示していた。1930年代には中国語によってスポーツを理解し、実践し、描写することが可能になっており、選手たちは英語をしやべる必要はまったくなかった。中国語化、中国人化したスポーツは、それ自身を中国化することを余儀なくされたのである。

南京政府と国民体育

スポーツの中国人化が完了して以後、スポーツの中国語化は主権の争奪のためではなく、スポーツの中国化の一環として進められていく。

体育やスポーツに積極的に干渉しなかった北京政府とは違って、南京政府は体育やスポーツを国家の事業として推進しようとした。1930年の第4回全国運動会を浙江省政府が主催したのはその一環であった。大会会長をつとめた戴季陶は審判を集めて開いた宴席で、一般の民衆にもわかりやすいように、体育の用語を中国語に改めるよう希望した。その具体的な方法として、団体を組織して、さまざまな言葉を審査・決定し、それを体育上の標準語とすることを提案した¹³⁵。

同年9月、上海中華運動裁判会で蔣湘青が次のような提案をした。

競技の審判はこれまで英語を用いてきたが、これはじつにきわめて恥ずべきことであり、また論理に合わないことであって、自ら弱小民族と認めていることを示すものというべきである。なぜなら、強国の国民は決して本国の言語文化を犠牲にしようとはしないが、弱小民族はかえって往々にして数か国の言葉を流暢に話すことができる。さきの東京で挙行された極東大会で、審判はみな日本語を使っていた。中国とフィリピンの選手はみな何が何だかさっぱりわからなかったが、かといってどうすることもできなかった。いま中国人と中国人が試合をするのに、かえって中国語ではない言葉を用いて審判をしているのは、まことに不体裁きわまりない。中国人と外国人の試合であっても、厳格に言えば、〔中国で開催する以上〕中国語で審判すべきである。……ゆえに以後、一律に中国語を用いて審判をおこない、わが独立国家の精神を維持すべきである¹³⁶。

¹³⁵『申報』1930年4月7日。

¹³⁶「教育消息 体育界用語之新紀元 裁判比賽一律改用國語」『河南教育月刊』1卷2期、1930年11月。

蔣は1921年に南京高等師範学校体育専修科を卒業、セント・ジョーンズ大学の体育教師となったが、「国旗事件」にさいして大学を去った人物で、中華全国体育協進会が所管する大会の審判、ルールをめぐる紛糾の解決、各種ルールの管理・統一を目的として1926年に結成された中華運動裁判会の創設者の一人である¹³⁷。蔣の提案は承認され、まずサッカーとバスケットボールの中国語を制定して公布することとなった。天津体育協進会でも審判の中国語化を検討していたが、満洲事変の影響で停滞していた¹³⁸。

1932年夏に開かれた全国体育会議で、「スポーツ競技には全て国語を用いるべきである」という議題が提出された¹³⁹。その理由は、中国人が流行を求め盲従しやすいために、競技場で片言の外国語を使うことがかっこいいと考えているが、同じ国民同士で競技しているのだから外国語を使う必要はなく、かえって国体を傷つけるおそれがあるからであった。また、1930年の極東大会で日本の審判が日本語を用いたために、サッカーの選手権を日本と引き分けるという屈辱を味わったことも挙げられた¹⁴⁰。

1933年の全国運動会を前にして、英語の使用は民族の自信力を墮落させるから、役員、審判、選手のいずれも英語を用いてはならないと規定された¹⁴¹。同様の提案はその後もたびたびなされ、とくに全国運動会の前には必ず問題になっている¹⁴²。また、1936年に成立した中華体育学会はその中心事業の一つとして「体育名詞の審定」を挙げたが、翌年に日中戦争が勃発して事業は一時中断を余儀なくされた（全国運動会も中止）。以上の事実は、逆に、スポーツ界に英語が蔓延し、除去が困難だったことを物語っている¹⁴³。

¹³⁷『申報』1926年10月21日。

¹³⁸ 涓「天津籃球界之分析」『体育週報』1巻2号、1932年2月13日。

¹³⁹「全国体育會議両提案」『体育週報』1巻22期、1932年7月2日。

¹⁴⁰ それまで中国のサッカーは極東大会で8連覇中だった。この大会ではバスケットボールでも審判をめぐるトラブルがあり、日本人審判が長文の弁明書を発表するという前代未聞の出来事が起きている（『時事新報（東京）』1930年6月5、6、7日）。

¹⁴¹『申報』1933年8月23日。

¹⁴²『申報』1934年8月3日、1935年4月9、10日、1936年10月10日、楊介生「改革体育術語的商榷」『勤奮体育月報』3巻5号、1936年2月、邵汝幹「對於本屆全國運動大會之建議」『勤奮体育月報』4巻7号、1937年4月など。

¹⁴³ 游鑑明『運動場内外：近代華東地区の女子体育（1895-1937）』中央研究院近代史研究所、2007年、172頁にいくつかの事例が紹介されている。

1938 年夏、天津体育協会主任の郭蔭軒はラジオ放送のなかで 20 年前の体育を次のように振り返った。

当時の体育はほとんど学校の学生の独占物であり、一般の民衆は「体育」がどういうものかわからず、尋ねるものも少なかった。そのうえ、当時の一般の体育用語は、アメリカ人が唱導していたために、すべて米語であり、なおさら人びとは理解できず躊躇することになり、ますます体育の発展は望みがたかった¹⁴⁴。

天津にはもともと民族主義的傾向の強い天津体育協進会が存在したが、日本軍の占領後に市教育局顧問岡部平太の指導のもと、天津体育協会が組織されていた¹⁴⁵。郭の言葉にみえる反米意識は、日本への協力の裏返しであり、そのことは演題「華北体育の展望と中日満体育の提携」からも窺うことができる。日本人が占領地のスポーツを掌握しようとしたのは、それを青年の反日感情を緩和する効果的な方法と認めたからであった¹⁴⁶。日本の占領下で中国人はスポーツを解釈する権利を失い、スポーツは日本を盟主とする大東亜共栄圏のなかに位置づけられていった。

重慶の国民政府にとってもスポーツは重要であった。そもそも、近代に戦争が総力戦の形態をとるようになって以降、政府や軍は平時から兵力源としての国民の体育に関心を寄せるようになった。戦時には国民体育への関心がさらに高まる。国民体育の一環としてスポーツを実施するために、戦時という悪条件のなかでもスポーツの中国語化の作業が続けられた。1938 年 9 月、中華体育学会研究委員会は『体育名詞』の編輯をおこなうことを決定し、全体を 10 項目にわけ、それぞれ責任者を決めた¹⁴⁷。1939 年には中英庚款教育文化事業から補助金を得て、国立編訳館と共同で作業が進められた¹⁴⁸。1940 年 10 月の全国国民体育会議にあわせて開かれた体育展覧会で『体育名詞』の初稿が公開された。ただし、その後は作業がはかどらなかったようで、国立編訳館編『体育名詞』が刊行されたのは 1948 年のことだった。いっぽう、台湾では 1951 年

¹⁴⁴ 北京『新民報』1938 年 7 月 23 日。

¹⁴⁵ 北京『新民報』1938 年 2 月 15 日。

¹⁴⁶ 拙稿「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』93 卷 1 号、2010 年 1 月、拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012 年。

¹⁴⁷ 重慶市体育運動委員会、重慶市志総編室編『抗戦時期陪都体育史料』重慶出版社、1989 年、54-57 頁。

¹⁴⁸ 『申報』1939 年 1 月 21 日、9 月 25 日。

にあらためて体育名詞審査委員が任命され、1953年7月に国立編訳館編『体育名詞』（主任は郝更生）が刊行される¹⁴⁹。かくてスポーツの中国化は一応の完成を見たのである。

おわりに

スポーツの翻訳の歴史は、近代東アジア文明圏の例外ではなく、近代東アジア文明圏の存在を前提にして展開した。近代的学校制度に日本式体操が採用されたことは、近代東アジアの歴史が共通の基盤のもとに展開していたことのなよりの証拠である。日本ではスポーツはごく初期を除いて日本人によって担われ、特殊な用語を除けば、日本語で理解され、プレイされていた。もっとも、それが広く社会に受け入れられるには、武士道野球のような正当化、あるいは理論武装が必要であった。中国ではスポーツは外国人によって指導、運営され、外国語で理解され、プレイされていた。社会から遊離したスポーツを社会に包摂するエージェントの役割を果たしたのがYMCA体育主事たちであった¹⁵⁰。彼らは日本式体操に対抗するために、スポーツの中国語化をはかった。彼らが最終的に目指したのは、中国の社会を変革し、デモクラシーとキリスト教をもたらすことであった。1910年代の中国では、近代化とキリスト教化のあいだに大きな矛盾があるとは考えられていなかった。第一次世界大戦が終わると軍国主義との表面的な妥協も必要なくなり、壬戌学制で学校体育をアメリカ化（スポーツ化）することに成功した¹⁵¹。

スポーツの中国語化は、スポーツの普及をもたらすいっぽう、中国人の主権意識を高めた。言葉を持ちながら発言権がないという状況はスポーツの世界に限られなかった。1920年代のナショナリズムの高揚は、キリスト教や外国人の存在を許さず、スポーツ界でも中国人化が急速に進んだ。こうして中国人は初めて自分たちのスポーツを解

¹⁴⁹ 国立編訳館編『（教育部公布）体育名詞』国立編訳館、1953年、劉彩霞主編『百年中文体育図書総彙』北京体育大学出版社、2003年、8頁。上海版は295頁あるのに対して、台北版はわずか67頁の小冊子である。

¹⁵⁰ 日本にもYMCA体育主事はいたが、中国と比べると、その影響力は問題にならないほど小さかった。

¹⁵¹ 日本でも同じころ自由主義体育が広まった。

釈する権利を手に入れた。その重要性は、フィリピンと比較してみれば瞭然であろう。フィリピンも初期の中国と同じようにスポーツは外国人の指導のもと、英語でおこなわれていた。スポーツは徐々にフィリピン人化されるが、スポーツのフィリピン語（タガログ語）化、フィリピン化は一向に進展しなかった。植民地フィリピンに求められたのはアメリカ化であり、それはスポーツの世界でも同じであった。スポーツはフィリピン人をアメリカ化する手段であった。

スポーツの解釈権を手に入れた中国人は、スポーツの国家化を目指す南京政府のもとで、スポーツの中国化に取り組んだ。いっぽう、スポーツの中国語化はスポーツの中国化に不可欠な作業であったが、遅々として進まなかった。スポーツは依然として少数のエリートに独占され、階級の標識として機能しており、その大衆化、中国化は難しかった。しかし、戦争の勃発がスポーツの中国語化を差し迫った課題にする。そして、戦時中の作業をもとに、『体育名詞』が刊行され、スポーツの翻訳は一つの区切りを迎えることになる。

附論 スポーツ用語の翻訳

野球 (baseball)

中国では19世紀末にミッションスクールの学生のあいだで野球が始まった¹⁵²。彼らが英語でプレイしたのは言うまでもない。20世紀に入って、多くの中国人が日本へ留学するようになると、野球に親しむものが現れる。たとえば1901年に来日した黄興は、放課後に野球（打球）を楽しんだ¹⁵³。1903年には早慶戦が始まり、日本人学生のあいだ

¹⁵² 野球導入の経緯については、拙稿「上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史」を参照。

¹⁵³ 汪謙「黄興留日与上師書」田伏隆主編『憶黄興』岳麓書社、1996年。なお、1903年に帰国して湖南の明德学堂で教師をしていた黄興が「揚子江野球隊」を結成したとする説があるが（張振美ほか著『中国壘球運動史』武漢出版社、1990年、8頁に引く「本会歡迎辭 陳副議長風光講演」『湖南教育通訊』1巻1期、1944年）、30年以上ものちの回想であり、1911年に結成された「野球会」と混同していると思われる。「野球会」については、黄一欧「黄興与明德学堂」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編『辛亥革命回憶錄』2巻、文史資料出版社、1962年、136-137頁に見える。なお閻家篤「新中国建立前長沙体育運動概述」『湖南体育史料』3輯、1983年12月は、1901年に長沙に「野球訓練班」があったとするが、典拠は不明である。

で野球への関心が高まっていた（早慶戦は応援の過熱のため1906年に中止される）。同年創刊の『湖北学生界』に掲載された生雲堂片桐本店の体操・運動用具の広告には、鉄アレイやインディアンクラブとともに、バットやグローブが描かれており、中国人留学生がなんらかの形で「野球」に触れる機会は少なくなかったであろう。留学生が日本で刊行した雑誌には、もっぱら「野球」が用いられた¹⁵⁴。

しかし、中国国内で「野球」を知る人は少なかった。たとえば、1906年に押川春浪『海底軍艦』（1900年）の翻訳『秘密電光艇』（金石、楮嘉猷訳）が商務印書館から刊行されるが、「此島で一番流行るのは端艇競漕と野球競技とであつた」という箇所は「在此間最足娯楽者、為舢舨競走蹴鞠競踢」とあたかもサッカーの如く訳されている。

1907年、雑誌『世界』で各種スポーツが紹介されたとき、野球は「^{ベ이스ボール}貝斯巴爾」と音訳された¹⁵⁵。1908年初版の『英華大辞典』には「棍球（一種球戯）」とある¹⁵⁶。1908年10月末に世界一周をしていたアメリカの艦隊8隻がアモイに寄港し、米兵同士が野球、サッカー、テニス、ボート等の試合をした。その模様を報じた*North China Daily News*の記事を転載した中国語の雑誌や新聞は野球を、『申報』が「棒球」、『時報』が「拍球」、『東方雑誌』が「球戯」と訳した¹⁵⁷。1909年から1911年にかけての『申報』ではもっぱら「野球」が用いられた¹⁵⁸。たとえば、1911年の「留学界之尚武大会」という記事は、東京の中国人留学生が尚武精神を重んじるようになり、十余りの「野球倶楽部」が組織されていると報じている¹⁵⁹。

1912年に『湖南教育雑誌』に掲載された何卜の「野球講義」は、安部磯雄『野球案内』（亀井支店書籍部、1907年9月）の翻訳だが、日本語のカタカナの部分すべて英語に置き換えている¹⁶⁰。湖南では日本からの帰国留学生を中心に一時野球が盛んであったことが、訳出の背景にあるだろう。YMCAの雑誌『進歩』に掲載された趙紫宸の野球紹介はアメリカの資料をもとに書かれたと思われるが、原名は「塁球」とであると断り

¹⁵⁴ たとえば、伯林「論体育之必要」『雲南』3号、1907年1月12日。

¹⁵⁵ 「貝斯巴爾」「世界進化之略跡」『世界』2期、1907年10月。

¹⁵⁶ 参照したのは顔惠慶ほか編『英華大辞典』商務印書館の第4版（1912年6月）。

¹⁵⁷ 『申報』1908年11月1日、『時報』1908年11月6日、『東方雑誌』5巻11期、1908年。

¹⁵⁸ 『申報』1909年8月31日、1910年6月25日など。

¹⁵⁹ 『申報』1911年1月26日。

¹⁶⁰ 何卜「野球講義」『湖南教育雑誌』1年2期、1912年7月1日。

つつ、「野球」を使用している¹⁶¹。ただし、個々の訳語には違いがあり、たとえば投手を何トは日本語のまま「投手」としているが、趙は「発球員」と訳している。趙自身は1913年の別の文章で、「足球」や「野球」は訳語として統一されつつあると述べており、この時期には「野球」が優勢であったことが窺える¹⁶²。

翌1914年5月に開催された第2回全国運動会の報道では、『申報』『時報』『時事新報』のいずれもが「撃球」という訳語を用いた¹⁶³。その直後に『申報』に開催された極東大会に関する『申報』の記事は「棒球」を用いている¹⁶⁴。徐卓呆、すなわち中国体操学校校長の徐傳霖は小説家でもあったが、1914年秋に『申報』に連載していた「滑稽小説魔玉」の第25回で、「塁球」の場面を描いている。日本留学経験者ならではの着想であるが、読者のほとんどは登場人物の頑公と同じように「塁球がどのようなものなのか全く知らなかった」であろう¹⁶⁵。セント・ジョーンズ大学の校内誌『約翰声』は1913年から1915年にかけて野球に関する記事が複数掲載されたが、訳語は「木球」「棍球」「撃球」「野球」などと一定していない¹⁶⁶。

1915年の極東大会をめぐる報道で野球の訳語はほぼ「棒球」に統一され、『新聞報』だけが「塁球」を使った。5月5日に上海各紙に掲載された記事は「野球」は「棒球」の別称であるとわざわざ断っているから、「棒球」はまだ目新しい言葉だったのだろう。これに対して北京の清華学校の校内誌『清華週刊』では、1914年3月17日に「野球比賽」という記事があるものの、その後はもっぱら「棒球」を使っている¹⁶⁷。とするなら、華北ではいち早く「棒球」が普及していたことになる。そもそも当時の中国で野球をしていたのは華北の一部の学校にとどまり、上海のミッションスクールですら野球はほとんどおこなわれていなかった¹⁶⁸。そして、少ないながらも中国に根付いたのが

¹⁶¹ [趙] 紫宸「室外運動之第三種 野球篇」『進歩』15冊、1913年1月。

¹⁶² 紫宸「学校運動改良之急務」。

¹⁶³ 『申報』1914年5月26日、『時報』1914年5月13日、『時事新報』1914年5月26日など。

¹⁶⁴ 『申報』1914年6月8日。

¹⁶⁵ 卓呆「滑稽小説魔玉（二十続）」『申報』1914年11月17日。

¹⁶⁶ 張肇元「約翰春秋 予備迎敵」『約翰声』3期、1913年4月は「木球」、「約翰春秋 棍球大勝」『約翰声』8期、1914年10月は「棍球」、「野球競芸」『約翰声』7期、1915年7月は「野球」、記者「紀運動」『約翰声』8期、1915年10月は「撃毬」。

¹⁶⁷ そのほか、1914年5月5日に一度だけ「棍球」が見える。

¹⁶⁸ 拙稿「上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史」。

アメリカ系の「棒球」であった。上海 YMCA は「墨球」を普及させようとしたが、そもそも地元上海ではほとんど需要がなかった。こうして 1910 年代後半に華北の「棒球」が「野球」「墨球」を圧倒していった¹⁶⁹。ちなみに香港の新聞データベース Old HK Newspapers によると、1920 年代の中国語新聞の記事名のうち、「棒球」は 5 件、「墨球」は 177 件であり、香港では「棒球」が定着していなかったことがわかる¹⁷⁰。

テニス (tennis)

テニスは比較的早くから英漢辞典の項目にあがっており、「打波戲名」(波はボールの音訳)、「小皮毬戲名」などの説明的な訳語があてられていた¹⁷¹。『申報』1902 年 12 月 26 日に掲載された長崎の探訪記者からの書簡に「網球」をしたという一節がある。これは日本で「庭球」と呼ばれていたのをわざわざ「網球」に訳したものである。以後もほぼ一貫して「網球」が用いられ、「庭球」が使われることは稀であった¹⁷²。当時、日本のテニス界では日本独自の軟式庭球が主流であり、熊谷一弥ら世界的プレイヤーが台頭してくるのは 1910 年代半ば以降のことである。それ以前は中国テニス界における日本の影響はほとんどなく、「庭球」が採用される蓋然性は低かった。

サッカー (football)

テニスと同じくサッカーも 19 世紀以来、英漢辞書に採録され、「踢鞠」「踢球」「蹴球」などの訳語があてられてきた。1881 年の『申報』は「踢鞠」の語で西洋人のサッカーの試合を報道した¹⁷³。1903 年に北京の外国人兵士のサッカーについての記事に天津の『大公報』は「踢鞠競争」というタイトルをつけた¹⁷⁴。

¹⁶⁹「野球」の使用例は日本に関する報道に多い。また、ゴルフを指す場合もあった(1931 年の「青島之野球熱」『北洋画報』642 期、1931 年 6 月 25 日など)。

¹⁷⁰Old HK Newspapers (<https://mmis.hkpl.gov.hk/old-hk-collection>)。「墨球」は 1919 年にも 1 件ある。1930 年代になると、「棒球」が急増し、「墨球」361 件に対して「棒球」224 件となっている。

¹⁷¹『英華和訳字典』(1879 年)、『新增英華字典』(1899 年)。いずれも「近代英華・華英辞書集成」(大空社)に所収。

¹⁷²たとえば『時報』1910 年 10 月 20 日、「庭球競賽」『清華週刊』81 期、1916 年 10 月 4 日、『申報』1917 年 5 月 12 日など。言うまでもなく、日本関係の記事に多い。

¹⁷³『申報』1881 年 12 月 1、2 日。

¹⁷⁴天津『大公報』1903 年 1 月 1 日。

「足球」の早い例として、セント・ジョーンズ書院で刊行されていた『志学報』の「春秋二季、為撃皮球之時、夏到玩網球、冬則易以足球」という文章を挙げることができる¹⁷⁵。これに対して、1907年の『教育世界』には同校サッカー部が「蹴球隊」と紹介されている¹⁷⁶。日常的には英語の football を使っていたのだろう。1908年のアメリカ艦隊の報道では、『申報』が「足球」、『時報』が「踢球」、『東方雑誌』が「蹴球」「踢球」と訳している¹⁷⁷。1914年5月に北京で開かれた第2回全国運動会を報じた『申報』は「蹴球」と表記しているが、1915年5月に上海で開かれた極東大会では各紙ともほぼ「足球」で統一されている。同年9月に商務印書館から刊行された『辞源』は「足球」で立項したが、「通称踢球」との注釈をつけており、この時点ではまだ完全に「足球」へ移行していなかった。しかし翌年にはYMCA関係者によって『足球規則』『足球』などの書物が刊行され、「足球」が定着していった。

陸上競技 (track and field)

『上海新報』は1868年11月に跑馬場で開かれた西洋人による運動会を「賽力」という語で表現した¹⁷⁸。このほか、「賽跑」「賽走」「跑人」などの表現が用いられることもあった¹⁷⁹。1881年に西洋商人たちの「賽力」で競われた種目は「擲錘」「跑定二百二十碼之遠」「拋球」「跳遠」「跳高」「要力」「移彈」「跑三腿兩人並立而以繩併縛其中間兩腿跑至一百五十碼之遠」「跑而中途以物阻之使之跑而兼跳」「拉索以大繩兩辺分拉拉過者為勝」などであった¹⁸⁰。このうち、「擲錘」（ハンマー投）、「跳遠」（走幅跳）、「跳高」（走高跳）は現在でも使われている。220ヤード走を「跑定二百二十碼之遠」と訳したのは、距離を決めて走るという概念が目新しかったからだろう。二人三脚、ハードル走、綱引は競技名というよりは競技の解説である。20世紀初に日本の体育が紹介されると、「競走」という言葉も使われるようになる¹⁸¹。

¹⁷⁵「網球出現」『志学報』2期、1905年6月。

¹⁷⁶「上海聖約翰書院之蹴球隊」『教育世界』151号、1907年6月。

¹⁷⁷『申報』1908年11月1日、『時報』1908年11月5日、『東方雑誌』5巻11期、1908年。

¹⁷⁸『上海新報』1868年11月3日。

¹⁷⁹『申報』1872年11月22日、1873年5月19、20日、12月1日、1875年9月30日など。

¹⁸⁰『申報』1881年11月24日。

¹⁸¹『申報』1905年5月7日。

個々の種目名の考証は別の機会に譲るとして、ここでは陸上競技の概念と訳語がどのように定着したかをたどってみよう。これまで見てきた野球やサッカーなどと違い、陸上競技は複数の異なる種目を統轄する概念である。初期の競技会や運動会の多くは陸上競技を含んでいたが、それ自体が一つのジャンルとして認識されることはなかった。こうした状況は、近代的な陸上競技会が導入されるようになってもすぐには変わらなかった。たとえば1910年の第1回全国運動会では、陸上競技のほかにテニス、バスケットボール、サッカーが行われたが、陸上競技を統轄する名称は見られない。

陸上競技の概念を初めて明確に示したのは、1914年4月に刊行された『運動規則綱要』（英文タイトル *Track and Field Athletics*）であろう¹⁸²。しかし「運動」は陸上競技に限定されないはなはだ漠然とした言葉である。1915年1月刊行の「南洋」体育会による「体育一斑」には、「運動の分野は野賽と田賽の二部に分かれる」とあり、トラック競技を「野賽」、フィールド競技を「田賽」と呼んでいる¹⁸³。これは現代の用法にきわめて近いが、このような理解は決して一般的ではなかった。1915年5月の第2回極東大会にまつわる報道を見ると、『進歩』には陸上競技にあたる言葉はなく、1915年5月5日の上海各紙に掲載された「遠東運動会四誌」は「田賽」（ただし『時報』は「賽跑」）を使っている¹⁸⁴。『申報』の得点表には、陸上競技の各種目のなかに自転車競技が紛れ込んでおり、陸上競技の概念がまだ曖昧であったことを物語る¹⁸⁵。同じ考え方は同年9月刊行の『辞源』にも見える。同書の「田賽」の解説は以下の通りである。

Field meet 「広場」で行なわれる運動遊戯。通称「田賽」。サッカー、テニス、野球、円盤投、砲丸投、高跳、幅跳など。

¹⁸²『湖南教育雑誌』4年4期、1915年4月の「運動規則綱要」は同書の中国語の部分轉載したものだろう。

¹⁸³「上海工業専門学校体育会「体育一斑」『中華教育界』4巻1期、1915年1月。

¹⁸⁴『新聞報』『申報』『時事新報』など。なお『時報』1915年5月16日には「賽跑擲球類」という言葉も見える。『申報』1915年5月21日は「田賽与競走」と、「田賽」をフィールド競技の意味で用いている。

¹⁸⁵陸上競技の概念が曖昧だった一因は極東大会の得点法にある。後年の極東大会は、陸上競技、サッカー、野球など競技ごとに国別順位を出し、その順位をもとに総合優勝を決定した。これに対して、1915年の極東大会では、100ヤード走、220ヤード自由型、テニスのダブルス、サッカーのそれぞれについて順位が決められ、その順位に基づいて得点を算出し、合計で優勝を決めた（団体競技は個人競技より若干得点が高かった）。

「田賽」とはフィールドでおこなわれる競技全般のことであった。現代語と同じ「田徑賽」が使われたのは、第2回極東大会以後のことである¹⁸⁶。江蘇省が各県に設立を準備していた公立体育場には器械運動部、球部、田賽徑賽部、技撃部（拳術など）、柔軟体操部、游泳部が設置されることになっていた¹⁸⁷。この「田賽徑賽部」は紛れもなく陸上競技を意味する。先述の通り、公共体育場の設立にはYMCA 体育主事が関係していたから、このような言葉が出てきても不思議ではない。1917年1月にはマクロイが商務印書館から『田徑賽運動』を刊行し、これ以降「田徑賽」が定着していった¹⁸⁸。

この「田徑賽」という言葉は日本人には奇妙に感じられた。

ベースボールの「棒球」、テニスの「網球」、フットボールの「足球」などいづれも適訳で、われ／＼にも直ぐ了解出来るが、「田徑賽」となるとハタと当惑する。諸君ツ、これは何のことだと思ひますか？曰く、田はフィールド、徑はトラック、賽はすべて競争、試合をいふから、即ち陸上競技のことなのである¹⁸⁹。

ついでに『辞源』の「運動会」の項目を紹介しておこう。

Athletic meet 多数の人が集まって体育の競技をすることである。紀元前にはすでにエジプトと西アジア諸邦で盛んにおこなわれ、のちギリシアに入った。オリンピックの運動競技会が最も有名である。中世以降、イギリスでもおこなわれるようになった。ここ5世紀の間、欧米の各大学では競技大会をしないところはない。広くおこなわれている競技は、「距離競走」、ハードル競走、走高跳、走幅跳、砲丸投、円盤投、サッカー、テニス、野球、水泳などである。1894年にフランスのクーベルタン男爵 Baron Pierre de Coubertin が「国際運動会」を発起した。各国の承認をえて、パリで大会が開かれ、オリンピックの運動競技会を復活させた。4年に1度挙行される。わが国では清末によくスポーツに注意するようになり、各学校では春秋に運動会を開いて競技することが多い。民国2年に初めてアジア各国

¹⁸⁶ 上海体育志編纂委員会編『上海体育志』91頁にセント・ジョーンズ書院陸上部の写真が掲載されており、「CHAMPIONSHIP TRACK TEAM 1905 一九〇五年田徑賽隊」というキャプションがついている。出典が不明なので、このキャプションが1905年当時のものか確認できない。待考。

¹⁸⁷ 『申報』1915年9月24日。

¹⁸⁸ 1917年2月に開かれた第6回広東省大運動会では、競技種目が徑賽、田賽、球賽に分けられたが、徑賽には競車（自転車競走）、競馬が含まれていた（『申報』1917年2月20日）。

¹⁸⁹ 弓館小鰐「スポーツ言語学」『東京日日新聞』1936年12月11日。

が連合して、フィリピンで第1回「遠東運動会」が開かれた。続いて〔民国〕4年に上海で挙行政され、「国際運動会」に参加する準備としている。

これは運動会というより競技会の説明である。従来の研究によれば、『辞源』は清末民初に大量に出現した新語の問題を解決するために編纂されたもので、数学や化学物質を除いて、来華宣教師系の訳語はほとんど採用されず、専門用語に関しては日本語がおおく採用され、とくに化学、図画、製造方面の言葉は専門辞書の項目をそのままもってきたようなもので、専門家でなければ必要もなく、また理解できないものであったとされている¹⁹⁰。では、スポーツ関係の言葉はなぜ日本語が採用されなかったのか。『辞源』の編校者一覧のなかに鄭富灼の名が見える。スポーツに関する項目が鄭によって書かれた保障はないが、スポーツそのものがまだあまり普及していない状況で、これほど詳細な記事を書くことのできる人物は鄭をおいてほかにはない。アメリカに留学し、スポーツをはじめとしてYMCAの諸活動に深く関わっていた鄭が日本語を採用しなかったのは当然だろう。

バスケットボール (basketball)

1895年末に天津YMCAのライオンが中国にバスケットボールを初めてもたらしたとき、英語の名称が用いられていたことはほぼ間違いない。一部の研究は当初から「筐球」と呼ばれていたかのように記述するが、根拠はない¹⁹¹。しかし、いつのころからか天津で「筐球」と呼ばれるようになったのは確かで、南開中学の創設者である厳修の日記には1915年3月6日に張伯苓と「筐球」を見たことを、1923年1月6日に南開と清華の「筐球」試合を見たことが記されている。張伯苓も1919年12月12日付けの書簡で、南開と清華の「筐球」試合に言及している¹⁹²。これに対して清華ではもっぱら「籃球」が用いられていた¹⁹³。「筐球」は南開、あるいは天津ローカルの言葉だった可能性が高

¹⁹⁰ 沈国威『近代中日詞彙交流研究：漢字新詞的創制、容受与共享』中華書局、2010年、403-430頁。

¹⁹¹ 蘭鳳翱「籃球運動引入天津考略」『体育文史』1991年5期、仇涌主編『天津通志 体育志』天津社会科学院出版社、1994年、181頁など。

¹⁹² 厳修日記編輯委員会編『厳修日記』3冊、南開大学出版社、2001年、1944頁、同書4冊、2482頁、梁吉生、張蘭普編『張伯苓私檔全宗』上巻、中国檔案出版社、2009年、15頁。

¹⁹³ たとえば「本校三育最優成績得獎表」『清華週刊』第1次臨時増刊、1915年6月26日。

い（『申報』にはわずか6例しかない）。「籃球」の初出はまだ特定できないものの、中国ではほぼ一貫して「籃球」が用いられたと見てよい。

日本では「籠球」が用いられたが、その嚆矢は、女子高等師範学校教師で東京女子体操学校の設立者でもある高橋忠次郎が1904年に榊原文盛堂から刊行した『籠毬競技』である。競技としてのバスケットボールが本格的に広まるのは、1913年にYMCA体育主事ブラウン（Franklin H. Brown）が来日して後のことであろう。当初はもっぱらカタカナ名称が使用されていたが、1923年の極東大会大阪大会の前後から「籠球」「籃球」という語が紙面に現われ始める¹⁹⁴。「籠球」は2月5日の『東京朝日新聞』に見え、『読売新聞』では5月24日が初出である。いっぽう、『大阪毎日新聞』では「籃球」が用いられている。『東京朝日新聞』でも1924年10月の明治神宮競技大会から1925年5月の極東大会までの一時期、「籃球」を用いたが、ほどなくして「籠球」に変わっている。これ以後、関東＝籠球、関西＝籃球という棲み分けが定着していくが、依然として「バスケットボール」という呼称が優勢であった。

バスケットボールは比較的翻訳しやすい語である。英和辞典を引けば、basketの訳語として「籃」と「籠」の双方が列挙されているので、いずれの訳語が用いられてもおかしくない。極東大会を契機に「籃球」の訳語が現れたということは、中国の訳語を輸入した可能性もある。1929年、のちに東洋史学者となる李相佰が「訳語考」を発表し、中国語で「籠」は底のないカゴを意味するから、「籠球」が正しいと論じた。これは理事会でも取り上げられ多数の賛成を得た¹⁹⁵。極東バスケットボール界で日本は長年にわたって最下位に甘んじてきた。バスケットボールの先進国である中国に対するコンプレックスがこの訳語の選択の過程にあらわれているように思われる。すなわち、「籠球」は漢字の考証に基づいた「正しい」訳語であると主張することで、漢字の本場である中国に対していくばくかの知的な優越感を味わうことができたのである。その考証が朝鮮人によってなされたのは皮肉であるが。

¹⁹⁴ 中国で「籠球」はCage ballの訳語として用いられた。

¹⁹⁵ 日本バスケットボール協会広報部会『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会、1981年、81-82頁、想白李相佰評伝出版委員会、韓国大学籠球連盟編『想白李相佰評伝』乙酉出版社、1996年、215-217頁。

バレーボール (volleyball)

中国のバレーボールは、呉文忠によれば、1905年に河北通県の協和書院と北京の滙文書院、また広州の南武学堂と香港の皇仁書院でそれぞれ始まったという¹⁹⁶。現在これが定説となっているが、呉は典拠を示していないので再検討の必要がある。そもそもバレーボールは1895年にYMCAで考案された新しいスポーツで、1905年の段階ではアメリカでさえほとんど普及していない状態であった。フィリピンでは1910年にYMCA体育主事ブラウン (Elwood S. Brown) が紹介し、日本では1908年に国際YMCA訓練学校を卒業して帰国した大森兵蔵が伝えた。中国のYMCA主事たちの年次報告でバレーボールが言及されるのは1913年9月末以降のことである。この年、福州、香港、上海、天津、雲南の主事がバレーボールに言及している¹⁹⁷。バレーボール普及のきっかけとなったのは、同年2月にマニラで開かれた極東大会である。このとき中国の選手はフィリピンのコーチからバレーボールの手ほどきを受け、即製チームで参加した¹⁹⁸。バレーボールに参加した選手たちは、帰国後、バレーボールの普及に取り組んだ。皇仁書院の校内誌にバレーボールの記事が登場するのは1914年12月のことである。1917年7月の記事によると、バレーボールは香港では比較的新しいゲームで、1913年に紹介されたという¹⁹⁹。早くも1913年秋にはリーグ戦が始まり、皇仁書院など9チームが参加した²⁰⁰。翌1914年秋には広州でも「^{ホワリーボー}華利波」のリーグが誕生し、南武中学、広東高等師範学校、培英中学、培正中学が参加した²⁰¹。いっぽう、天津の南開中学では

¹⁹⁶ 呉文忠『中国体育発展史』国立教育資料館、1981年、72頁。安徽省地方志編纂委員会編『安徽省志 体育志』安徽人民出版社、1993年、85頁は1910年に安慶、蕪湖、蚌埠のミッションスクールでバレーボールがおこなわれていたとするが、典拠は示されていない。

¹⁹⁷ Louis E. McLachlin (『中国年次報告』5巻、429頁)、John L. McPherson (『中国年次報告』5巻、469頁)、Frank M. Mohler (『中国年次報告』5巻、474-475頁)、Jesse C. Clark (『中国年次報告』5巻、164頁)、Alfred H. Swan (『中国年次報告』5巻、210、211、213、218-220頁)、Rascoe M. Hersey (『中国年次報告』6巻、243頁)、Cameron D. Hayes (『中国年次報告』6巻、322、328頁)。報告のタイトルはいずれも“Annual Report for the Year Ending September 30, 1913.”

¹⁹⁸ 国家体委体育文史工作委员会、中国排球協会編『中国排球運動史』武漢出版社、1994年、35頁。

¹⁹⁹ E. J. E. “Our Sports,” *Yellow Dragon*, December, 1913, “Volley Ball,” *Yellow Dragon*, July, 1917.

²⁰⁰ “A New Game, Volley Ball in Hongkong” *The Hong Kong Telegraph*, November 29, 1913. タイトルからわかるとおり、この記事でもバレーボールは新しいゲームとして紹介されている。

²⁰¹ 広東省地方史志編纂委員会編『広東省志 体育志』329頁。

1916年に周恩来が「^{フーリーボール}挖力球」の主力として活躍していた²⁰²。

バレーボールが中国語の主要メディアで最初に取り上げられるのは1915年の第2回極東大会のときである。『申報』は「手球」、『新聞報』は「掌球」（すぐに「隊球」に改める）、『時事新報』は「隊球（或名手球）」と表記した。その後の『申報』の極東大会関連記事を見ると、1917年の第3回大会では「手球」「^{ブロー}布勒球」「排球」などが用いられたが、第4回から第7回まではほぼ「隊球」で統一されている。ところが1927年に上海で開催された第8回以降はもっぱら「排球」が使われている。

なぜいったん定着しかけた「隊球」が「排球」に置き換わったのか。「排球」は『申報』では1916年の記事が初出で、YMCAがアメリカから輸入販売していたスポーツ用品の一つとして出てくる²⁰³。1910年代の『申報』の「排球」に関する記事は、澄衷中学に関するものを除くと、すべて広東や香港の記事である。どうやら「排球」は南方で広く使われていたらしい²⁰⁴。1910年代の例を挙げると、バレーボールが盛んなことで有名な広東省台山県で1918年に刊行された『譚氏学校実録』には「排球隊を組織した」とある²⁰⁵。また、1919年の第4回極東大会に参加したバレーボール代表は、「中国排球隊第四次遠東運動大会」とのキャプションがついた記念写真を残している。1922年5月刊行の『体育季刊』には広東YMCA体育主事が考案した「低網排球」が紹介されている。ネットの高さを下げて小学生でも楽しめるようにしたもので、「隊球」の変形、「隊球」の初歩との位置づけがされている。記事の紹介者呉蘊瑞にとって、バレーボールは「隊球」だったのである。なお、許民輝は第1回極東大会に参加して、帰国後にバレーボールを広めた人物の一人である²⁰⁶。

中国のバレーボールのメッカは広東、香港であった。それは極東大会の歴代の代表

²⁰² 王慶民「周恩来同志的中学時代（上）」『天津師院学報』1978年1期。

²⁰³ 『申報』1916年5月15日。

²⁰⁴ 黄鑒衡「近代中国排球運動」『体育史料』8輯、1982年9月は、1917年から1921年の広東全省運動会のプログラムに「隊球」と書かれていることを挙げ、この時期、広東では「隊球」が使われていたとする。しかし、Old HK Newspapersを検索すると、1920年代に「隊球」は9件、「排球」は145件で、圧倒的に「排球」が優勢であった。しかも、「隊球」9件のうち、7件はバレーボールに関係せず、残る2件は極東大会に関する記事である。

²⁰⁵ 国家体委体育文史工作委员会、中国排球協会編『中国排球運動史』10頁。

²⁰⁶ 国家体委体育文史工作委员会、中国排球協会編『中国排球運動史』口絵、呉蘊瑞「遊戲規則」『体育季刊』1巻1期、1922年5月。

が同地の選手によって占められていたことから明らかであろう。上海では1926年に江南大学体育協会がバレーボールのリーグ戦を始めるまでは、あまり盛んではなかった。1921年の『申報』には「排球、すなわち隊球は遊戯運動の一種であるが、上海ではこの遊戯に対してまだあまり興味が持たれていない」とする記事が掲載されている²⁰⁷。とすれば、バレーボールの本場であった南方の「排球」が「隊球」を駆逐したと推測できるのではないか。もしそうであれば、1927年の極東大会で「排球」が使われたことの意味は重い。というのも、この大会は広東から北上してきた国民党のもとで開かれた最初の競技会だったからである。なお、『申報』のデータベースによれば、「排球」の用例数が「隊球」を上回るのはまさしく1927年である。1930年には中華全国体育協進会が訳語を「排球」に統一することに決めた²⁰⁸。南方の北方に対する勝利ともいえるし、非YMCA系の訳語のYMCA系の訳語に対する勝利といえるかもしれない。ただし、「隊球」は1930年代を通じて使われ続けた²⁰⁹。

競技の力関係が訳語の選択に影響するという現象は日中間にも見られる。1910年代、バレーボールの導入期の日本では主として「バレーボール」「ヴォレーボール」「ヴァレーボール」が用いられていた。日本でバレーボールが主要なメディアに初めて取り上げられたのは、1917年の極東大会東京大会のときである。このとき中国の「排球」が紹介された。

極東競技には随分眼新しい競技があるが支那語で呼ぶと更に面白い。支那ではフットボール（蹴球）の事を足球と訳し、ヴォレーボールを排球と云つて居る。又マラソン選手の事を田徑賽員と称して居る。田徑賽員とは蓋し我国の断郊競走則ちクロスカントリーを訳したものらしい²¹⁰。

先述のとおり、中国代表は華南のチームだったから、日本人が接したのは「隊球」ではなく「排球」であった。そして、この「排球」という言葉は日本人にとって奇異な感じを与えた。にもかかわらず、1923年の極東大会のさい、日本のメディアは「排球」を採用した。バレーボール後進国の日本が、先進国である中国の呼称を取り入れたと

²⁰⁷『申報』1921年10月9日。

²⁰⁸黄鑒衡「近代中国排球運動」。

²⁰⁹1936年刊行の『辞海』は「隊球」で立項したうえで「亦た排球と称す」と注記している。

²¹⁰『東京朝日新聞』1917年5月3日。

考えるのが妥当であろう²¹¹。

「排球」の日本への伝播は、漢語によって媒介される東アジア文明圏の存在を改めて浮き彫りにした。ただし、「排球」の場合、日本から中国へという通常のベクトルとは逆になっている。これは、中国が競技的に日本を上回り、かつ日本でまだ翻訳がなされていなかったという条件が重なった結果生じた逆転現象であろう。中国でスポーツが本格的に導入されるのは 1910 年代のことであるが、近代漢語の多くはそれ以前に中国に流入していた。1910 年代になると、中国の近代化の経路は日本一辺倒ではなくなっていた。YMCA が活潑な事業を展開するのも、まさにこの時期であった。ただし、日本語が排除されたからといって、YMCA の訳語が定着するとは限らなかった。個々の訳語の定着過程を見るうえで、地域差の問題は重要である。野球やバレーボールのように、競技的に強い地域の訳語が、メディアの中心であった上海の訳語を駆逐することもあった。そもそも、近代漢語の中国への流入は、日本が近代化において一歩先んじていたことから生じた。清末の体操もその一環であった。これに対して、スポーツの場合、中国は日本に学ぶ必要がなかったため、日本語を取り入れる必然性はなかった。

本論では近代中国のスポーツを大枠で規定した日本、アメリカ、そして中国の関係を見てきた。しかしながら、個々の訳語が定着する過程では、それ以外のさまざまな力が作用していることが判明した。附論で論じたことは、まだまだ初歩的な考察にとどまり、それを証明するにはより精緻な研究が求められる。たとえば、地域差の問題にしても、附論では各地域の新聞雑誌を体系的に調査したわけではない。今後の課題としたい。

²¹¹ 史有為は「排球」を日本語からの外来語だと指摘し（史有為『漢語外来詞』商務印書館、2000 年、173 頁）、同様の見解はほかにも見えるが、根拠は示されていない。

